

從
軍
體
驗

海南島（ハイナン島）の空、星は またたく

小 西 進（六八）

昭和十八年に内務省文官試験に多くの受験者の内に、幸いにも合格。その機会に当時施行されていた海軍の司政文官に応募した。

募集条件の一つに徴兵検査の当年と前年そして後年は応じなかったが（私はその年に該当）募集係官に愛国精神を縷々熱心に要望して、応じて下さった。海軍海軍特務部の一単属文官として海南島（ハイナン）へ赴任することになった。昭和十九年一月中旬に鉄石輸送船に乗船。同行するは百五十人。九州八幡港を出港し、いよいよ外地へ向った。気概、横溢。しかし馴れ

ない船に酔って参った。台湾高雄御飯も喉へ通らず。沖繩をして台北の遠景もチラリ目にする。カオシュン（高雄）に約一週間停泊。内地は酷寒の時季だがもう夏のように暑い暑い上半身裸だ。一時停泊のせいか？ 船酔はすっかり馴れて任地ハイナン島まで約一週間のんびりと同僚等と談合し、夜は甲板で涼しく南方の風を受けて夜光虫のキラキラする深い海。降るような星空。南十字星とかを愛でる。楽しく和やかな旅、大きな危険がつかず覚えず一刻は戦争も忘れる。

いよいよハイナン島ユーリン港へ到着した。無事任地へ足を踏み入れられたと皆喜んで祝盃を傾け、高く大きい椰子の木マンゴーの実。撓（たぐ）にバナナ等と南方の風景一杯だった。これからは各々が任地へと貨物船に便乗しユーリン、サンア、ハイコウへ今暫らくの旅になる。乗船した舟は小さく材木を積んだ貨物船で船長と船員と僅か二人で中国人であった。島を遠くに見ながら船は行く。突然カリッと船は止まる。どうやら船尾を座礁したらしい。指揮官の指図によって、皆が船

首に塊まって離礁を思わく。ガヤガヤと次々に別れる同僚等と談笑し会い水盃の代りに積み込んだ椰子を呑み交す。すると爆音が耳の近くで急に飛び込んできた。咄嗟に顔を向けた。敵機だノースアメリカン25が網膜に焼き付いてきた。思わず伏せの姿勢。目に入った隣と同僚の血が高く吹き出した。大声で叫ぶ。何人かが敵の機銃掃射で犠牲になったらしく引返した襲来皆が集合してた船首部へ今度は爆弾を落した。瞬時にして和やかな空気が阿鼻叫喚の地獄の様相、共に大きな希望でやってきた同僚五十人は儚なく南の海に散尊りました。敵機は海面すれすれにエンジンを止めて飛来してきたと思われる。

船首の辺りが飛弾を受けて、ザックリ破損してる座礁し幸か不幸か沈むこともなく。潮の流れにだんだんと私物米犬とか材木とか海の彼方、ナンキン湾に帯様になって行く。

誰か一人が被弾して爆風に着衣はすっかり無く裸。そして顔面はやられて目も鼻もなくのつべら棒、流さ

れてはとロープで船にくくりつけ、海水にプカプカと浮き沈みつつ。誰か誰かと探索してもなかなか判りにくかった。来襲されたことを味方に連絡するも無線機もなく友軍からの哨戒もなく。これでは敵機が爆弾を積みこんでまた来襲されてはと疑惧一柄であった。然う期うするうちに爆音が響いてきた。敵機来襲か？と警戒して大きな不安になった。怖ろしかった。見張番の大声で「友軍機だ」、皆は吾れ先にと人をかい分けて上甲板にかけ昇った。真赤な日の丸を翼にまぶしく搭乗員は白いマフラーをなびかして二度三度旋回して通信筒を「救助船南下中」と連絡してくれた。地獄で仏、九死に一生とはこの事だった。心から助かったと思つた。救助船がなかなか到着しない。腹がへった。だんだんと夜の帳は暮れる。船室には戦死した友への読経があつた。その内に待ちつかれた救助船が到着して残つた同僚等は、海軍陸戦隊の兵舎に向えられてまずまず助かりました。夜遅く頂いたホカホカと白い飯と揚げと豆腐と葱を入れた温かい味噌汁が美味しかった。

今だに忘れられない御馳走だった。

制海も制空も敵の手中にあつて敗戦も近い情報もなく。ただ御国のためと死をも思わず、そのような時もあつた。戦争はもう厭です。

(田辺在住)

バターン作戦と広島被爆

田 宮 尚 武 (七五)

様々な戦争体験の中で、今もなお強烈に私の脳裏を去来するものは、バターン作戦と広島被爆である。

※バターン作戦

昭和十六年十二月八日、ハワイ真珠湾攻撃が日米開戦の日であった。当時私は比島派遣軍垣六五四部隊松原隊に所属し、遙か南方洋上大船団のもと比島上陸を目指して南進中であった。新高山に登れの命令を知らされたのは、その日の夕方五時の船内ニュースであった。目指すリングエン湾はまだ遠い。その夜甲板で見た南十字星は一段と怪しくきらめいていたのが印象

的であった。

十二月十七日未明、大船団はリングエン湾に到着。直ちに上陸作戦に入った。当日折悪しく波高くて発動艇移乗に手間どった。終りに夜明けの上陸で多大の戦死者を出した。血染めの海を後にマニラ攻略戦、バターン作戦、コレヒドール作戦と日本軍苦戦の連続であった。

当時のメモ帳二冊を今もなお大切に保存しているが、その一部を紹介しておこう（原文のまま）。

『焼けつく太陽の光が地上の万物を溶かし始まる。山から山へ、谷から谷へうつそうたる密林の中、絶え間なき進撃と肉弾相打つ自兵隊、今日も散った戦友の墓前に捧ぐ名も知らぬ花わびしく香る。折から轟然唸る敵砲雷の響、銃声こだます突撃の声、生死を乗り越えた瞬間のひらめき、このひらめきが総てを決めてしまう。こうした危険の連続が、やがて平和への前進と信じて戦い続ける。生温かい血潮の雰囲気を感じ初めた時急にドカンと炸裂する。耳がつまる。砂塵がパッと

舞い上る。とりつく間もないあのバガツク河畔の攻撃は多くの命を要求した。噴血と阿鼻叫喚、阿修羅の突撃思えば尊い戦いの連続であった。……以下略

安らかに眠れよ君が 露の下

手向けし花の わびしくぞ散る。

(昭十七、七、三 アルバイにて)

※広島原爆投下

昭和二十年八月六日午前十分、広島の中軍管区司令部から中部軍管区司令部に一通の暗号電報が届いた。

「新型爆弾落つ、広島全域救援頼む」

当時私は、二度目の応召で中部軍管区司令部参謀部第六分室に配属され、防空情報と本土決戦兵站作戦を担当していた。先に比島帰還昭和十八年二月から当時の本津農学校に勤務していたが、赴任早々学徒動員下令、北海道校農隊引率者として二か月間士別町、温根別村で作業をしていた。この時、再三乞われて軍時講演をしたのがきっかけとなり軍司令部参謀部に召集さ

れたのである。

暗号電報は早速参謀長に届けられた。午後一時参謀部非常召集直ちに講堂集合。国武参謀長から

『大庭高級参謀以下三十五名広島第二総軍司令部参謀部に出向せよ』

私も当然この隊員の一人として午後四時大阪駅から列車に乗った。食糧一か月分携行する。途中岡山以西は山陽線不通、やむなく岡山の連隊にトラック二台出動させ、一路広島に向った。広島駅前に着したのは翌七日午前七時をまわっていた。来て見てビックリ。駅前には数千人の負傷者がわめいていた。市内は一望焼け野原、ピカドン一発でこれほどまでに被害をうけるとは、ただ恐しいの一点につきる。この情景を表わす言葉を知らない。正にこの世の地獄と申しておこう。

我々は早速広島連隊（跡形もない）練兵場に急造のテントを張り、中国軍管区司令部の生き残り二名内一名負傷、健康と思われた井上中尉から被爆当時の状況を聞いた。我に一行は毎日被害調査と戦場整理、遺骨

収集に全力をあげたのである。
私の身体も多量の放射能で汚染されている。ピカド
ン一発、ノーモアヒロシマ、核のない世界平和を祈る

や切である。ノーモアヒロシマもう一度叫んでこの稿
を終りたい。

(普賢寺在住)



当時の出征風景

戦わぬ我が戦記 一ノ谷から正 定まで

遠藤 勇雄(故)

戦争という、私達には避けて通れない、また人間の
意思が通用せず、そして誰にもどうすることもできな
いことを、当然の務めとして教育を受けて成長してき
ました。私達の青春時代は、とうてい現在の青年達に
は、理解のできない私達年代の半生でありました。

生家は、島根県西部地方の山村の半自作半小作で、
兄三人・姉三人・弟三人の家庭では、とてもまともな
生活ができる状態ではありませんでした。それ故に兄
達は、早くから職業につき家計を助けておりました。
私も兄達と同様に、昔でいう「デッチ」奉公が人生の

スタートになったのです。いろいろな仕事をしました
が、昭和十七年五月、満州通化市の小学校で徴兵検査
を受けました。私は身長五尺二寸足らずでしたので、
とても合格する筈はないと、自分であきらめて会場に
行ったのです。会場では、係員がそれぞれの配置につ
いて検査をしておりました。受験するため来ている
壮士達は、ふんどしの裸で順番を待っていて、時間にな
ると、みんな順を追って検査を受けたのです。壮士
達はみんな身長が高く、私はうらやましくなるよう
な若者ばかりでした。私は順番に従って受験したのです
が、身長が不足するので到底上位合格は無理とあきら
めていたのです。検査員の最上官は陸軍大佐でしたが、
正面に立ってジロリと私を見降していました。おご
そかに書類を取り上げて「甲種合格」といわれたので
す。青年学校などで見知った壮士達の中には多く者が
「第一乙種」とか「第二乙種」の判定を受けていたの
で、私は啞然としたのです。その時に大佐は「君は背
丈は不足しているけれど、その他は充分兵としては申

し分ない身体であるから健康に十分注意して、入隊に差し障りのないように」と、申し渡されたのです。

その後十月頃に入隊先の通知があり、昭和十八年正月に勤め先で、盛大な見送りを受けて出発したのです。満鉄の列車で東満の牡丹江省の東寧駅に降りました。何といっても冬の北満でもあり、物凄く冷気で立っていることもできませんでしたが、私達を迎えに部隊から出迎えるの兵隊がきていて、防寒服の支給があり、出迎えるトラックで道路をノロノロゆられながら部隊の兵舎に着くことができました。

部隊名は第一国境守備隊第二北区二中隊でありました。そこは部隊本部があり、兵力は歩兵一ヶ中隊・砲兵一ヶ中隊・工兵一ヶ小隊・輜重兵一ヶ中隊でありましたが、ブラック造りの粗末な兵舎で、「こんな兵舎で生活するのは何とも恐ろしく」感じました。

最初の三か月は軍隊の基礎訓練でした。私は、いつも優秀な班長や教育上等兵に恵まれて小さな体ではありましたが、他の戦友達に互して大過なく過ごすこと

ができました。

軍隊生活の事は、私達年令の方々や先輩の人々のほとんどが味あわれたことで、特に申し上げるほどでもありません。ただし異なる点は、私の部隊が国境守備隊のために、訓練の内容がいささか違いました。私達の陣地のすぐ前が「ソ連」であり、訓練の内容はすべて守備のためのものでありました。もし「ソ連軍」の攻撃を受けた場合、国境線を死守して、一時「ソ連軍」の進撃をストップし、後続部隊の到着を待ち、戦闘準備完了までの時間をかせぐ守備演習の連続でした。そのため訓練は陣地で行われ、各種兵器操作になれて、最も有効に身体を働かせて敵をくい止める。それ故陣地は、生活訓練そして死に場所でもありました。

一通りの教育が終わると、それぞれの能力に適した通信・自動車などの特別教育を受けるのです。そしてまた上等兵候補兵は、その後一段と激しい訓練が続きます。私は、その中で、関東軍が最も強大な陣地と自負する第一国境守備隊第一地区三中隊訓練に廻され、

徹底的に守備訓練を受けました。

その後、旅順の下士官教導部隊に行き、そこで下士官になる教育を受けたのです。夏の半ばでの教育隊は、ロシア兵舎のきれいな部隊で始まりました。毎日の激しい訓練は、当然目前に迫っている戦争要員となるためのものでした。その訓練は過ぎし日露戦争の時の古戦場二百三高地とか東駿莞山北保ルイ等の攻撃・守備の訓練の連続でありました。

そんなある日、旅順の町から少し離れた谷で、「関東神社の落成式があるから、参拝するように」と、全員が外出しました。行ってみて驚きました。南方の戦線や北海の島で苦しい戦いをしている日本に、こんな余力があるのかとびっくりするような光景でした。見事な大鳥居が白木造りで建ち、それをくぐると正面にさぞんとした金色に輝く神社が建立されていました。暑い太陽に照り出された屋根は赤銅版でふかれ、柱も戸板も全部白木造りの見上げるような大層な神社でした。木材はほとんどが台湾産で白木がもったいないよ

うでした。伊勢皇大神宮の分社であり、東条大将が計画したのだそうです。このような資材が、よくあったものと驚いたのが本音でした。当時日本国内では、南方戦線で退却を余儀なくされ、物資不足で家々の金具類が供出され、食糧・衣類等が不足し、不自由な生活が強いられました。私の部隊また関東軍においても、南方戦線に兵員・武器弾薬等を引き抜かれていました。我が国境守備隊では、一番大切な兵器を一夜の内に持ち出されて、その後に丸太棒を細工したベニヤ板作りの模造品が、並べられるようになってしまいました。私は「このような状況での守備戦闘が苦しい」といわないながら、内心心配していたのです。部隊長は、「神兵たれ」と訓示していましたが、「武器を持たぬ兵に何を望むか」と不満でした。軍は政論政治にかかわらず「一意専心己を捨てて任務に推進すべし」と、日夜教えられてはいたのですが、あの神社には頭を下げる気がしませんでした。

旅順の兵舎とは、昭和十八年八月に別れ、今度は遼

陽の方に移りました。満州は、ボチボチと秋風が吹き始める時節でした。立派な兵舎ではありませんでしたが、南方に部隊が転出した後、荒れた兵舎でありました。大掃除をして住めるようにしたのですが、自壁に書かれていた落書きは、消すことができず、先住部隊か南方に出発する時の気持ちが良い想い浮かべることができました。

ここは日露戦争の折、日本軍が大苦戦した所で、「橘大隊長の唄」でよく知られた所です。ちょうど地形が、私達の所属していた第一国境守備隊の正面のソ連軍陣地とよく似ていたので、演習にも一段と熱がはいりました。

その部隊の営庭は、荒れていましたが、春まで前部隊の兵達が丹精こめて作っておいたのでしょうか、初秋の夕陽に「日まわり」の花が咲いていました。九月半ば頃その花から「黒い種」を取り出して、少量の塩をふって食べたことがあります。満州で茶を飲む時に出された「クワズル」という実によく似て懐かしい味

を、戦友達と味わったものです。

昭和十八年十一月二十五日頃、すべての訓練予定を終わり、原隊に復帰をしたのです。

今思い出しますと何と空しい一時期ではありませんが、私達は一生懸命でした。祖国のために我が身を忘れて働いたのです。しかしながら何といっても青春時代の頃ですから、人それぞれに異なった想い出があると思います。私はこれからその過ぎ去って、そして現在の若者の見ることのできないことを、想い出として書いて見たいものと思っています。

(興戸)

私と戦争

西川 輝 数 (六)

大正十五年生れの私が、少年期を過した昭和十年前後は、満州事変・日中戦争が相次いで始まり、国内では、二・二六事件が世間を騒がす等、内外は混々とした世情で、戦争抜きでは成長できない時代だった。

昭和十三年、中等実業学校に入学し、高学年の十五歳の時、日本は、太平洋戦争に突入した。早くから、すべての中学校に、陸軍予備役将校が配属されて、教科の中に、必ず何時間か軍事教練が組込まれ、満十八歳で、中等教育の終る頃には、実弾射撃が出来て、小規模な歩兵戦闘に適應できるように訓練された。中学

在学、五年間に、級友約四十人の内、十人余りが旧海兵・陸士・予科練等に志願、学窓を去って行ったが、四人は帰らなかった。最後の一学期を残して繰上げ卒業になり、昭和十八年末、呉海軍施設部に就職した、身分は、海軍々属だった。

この頃、家庭では、兄四人が、次々と陸軍に召集されて、満州・中国・南太平洋へ出陣した。私も含めて兄弟五人が軍服を着ていた時には、父が、毎朝・毎晩、仏壇に向って、般若心経を唱え、子供の武運安全を、懸命に祈っていたのを覚えている。それでも、兄の一人が結婚間もない義姉と、幼な子を残し、南海のある島で、二十五歳で玉碎した。

昭和十九年後期には、太平洋戦争も末期、一億玉碎が合言葉となり、国民がその渦中に巻き込まれることになった。

私も、志願形式で、いきなり海軍技術(土庫)下士官の軍服に着替え、促成訓練のため、呉海兵团に入団した。ちょうど、満十八歳四か月、今、相撲界の人気

を一身に集めている、貴花田が、昨年、最年少幕内優勝した時と同年代だった。

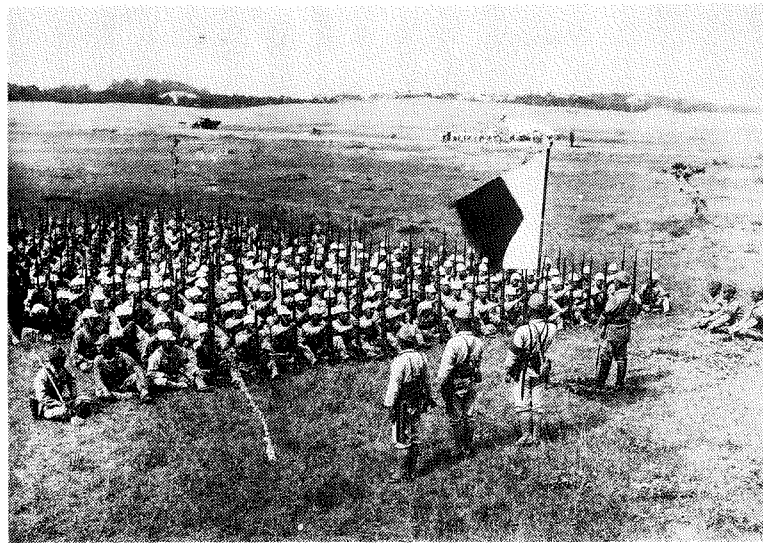
昭和二十年早々、内地の海軍設営隊に配置されて、海軍航空基地建設の任務に着いた。米空母艦載戦闘機が、毎日、日課のように飛来して、築造したばかりの滑走路を爆撃し、築造と破壊が繰返された。

この頃、日本上空の制空権も、日本側に無く、米軍戦闘機は、地上で退避している私達が、見えているかのように超低空で迫り、正確に銃撃を加え、五十キロ爆弾を投下して来た時は、ほんとうに恐いと思った。

ある時だった。弟のように面倒をみていた、十五歳代の少年飛行兵達が、搭乗する飛行機も無く、基地築造に配転されていたが、米戦闘機に襲われ、何人かが集団で疾走退避している最中、急降下爆撃され、一人が爆弾片で、胸を深くえぐられ、眼を見開いたまま、天を仰いで戦死した時には、彼にすがって、無情な時代に生まれ合せた、私達の青春のはかなさに憤慨した。ある日、五十歳くらいの婦人の慰問を受けたことが

らないと思う。

(田辺在住)



演習終了後の総評風景

あった、その人は、早く米国に移民し、開戦によって、海外で築いた資産を総て放棄し、帰国した。その人から「米国では、在米日本人が、ひどい目に会っている、どうしても、この戦争に勝って欲しい」と聞かされた時には、軍人である以上、同胞のために戦うのだと、若い血潮を、素直に湧かせたのを覚えている。

戦争は、如何なる理由があろうと、国民にとって、無い方が望ましいと思うのは、何時の時代でも、どの国でも同じであろう。自由は制限され、肉身との離別、逃れられない犠牲者の発生等、悲劇と忍耐が強要されるからである。

私は今、六十五歳まで生を受け、戦中から戦後に亘り、日本人全部が経験した、あの貧困と苦痛に比べ、戦後四十五年にして、豊かで、自由な、満ち足りた日々を送り、改めて、平和の中で生きることの幸せを痛感している。この幸せは、過去の歴史の中で、その運命に耐え抜いた、多くの先輩同胞や、犠牲者の上に築き上げられた平和であることを、総ての人が忘れてはな

関東特別大演習に参加して

芝 高明 (八三)

一、関東特別大演習に参加して

昭和十六年七月十五日、特編第一号臨時召集により、中部第四十三部隊に応召、同二十五日久保隊に編入。動員下令二百号により、同年七月三十一日、独立自動車二百六十六中隊に転属し、車輛三十輛編成にて八月二十二日京都発。二十五日釜山上陸。九月一日北満、^{ハイル}海拉爾に着く。当地大興安嶺を過ぎ、北緯五〇度くらいの地点で、その時も零下四〇度であった。その地の警備に当たり、ジャイノールと言う湖海がある、冬期は十月から五月頃まで零下三〇度くらいで、この湖も

全面凍結して如何なる砲車でも、軍用車でも自由に演習出来るのである。三メートルくらい氷が張って、兵隊たちは警備の休みの間に湖に行き、五十センチくらいの穴を掘って魚をすくい揚げると一瞬の間に冷凍魚となる。当地の警備一か月も終り、最北端の満州里へ移動した。この地はロシアの国境地点もすぐ前方で、かの演習や訓練も眼前に見える。当地の警備は車輛は全部地下に納めて対ロシアの警備訓練や演習に備えていた。

只北満五〇度以北になると最高零下五八度の時があった。酒も醬油も凍結し、演習に出動すれば時計も止まり、自分の小便もその場で凍ってしまふのである。それより一番気を付けねばならぬことは、凍傷の害である。かかればすぐ指はローソクのように白くなってくる。また満州里は、オオカミの多い地帯で、銃を持たないと命も取られることもある。ある時、隊の演習があった。全部車輛が発出出来るのに三時間もかかった日もあり、これはロシアから攻めて来たら一発にし

てやられると思うと自動車部隊の編成に考へねばならぬと思った。

昭和十八年八月十日下午関着、十八年八月十五日京都着、召集解除となった。

二、日支事変に参加して

時は昭和十二年八月二十四日、動員下令がきた。(赤紙召集)すると間もなく、四、五日の猶予しかないと、心境が一変した。精神の緊張感で胸一ぱいである。七月一日に長女が出産して二か月も過ぎてない矢先であった。これで国のために奉公が出来、家のためにも名誉である。人間一変無の境地になった思いがした。そして八月二十七日門出の日が来た。先ず仏壇に報告す。隣組の方々全員が日の丸の旗を持って役場までおこつてくれる。途中村長さんや助役さんや警察官の人も在郷軍人会長始め全員の見送りである。役場で一般との別れの挨拶をやつて、歩兵九連隊補充第六中隊に

編入、入隊したのである。十月七日、北支那派遣のため、北宮を出発。十月八日、神戸港を出発、始めて見る輸送船一万トン級の「利根川丸」であった。真黒に染めた巨体は勇壮そのものであった。その船中の内装は、さすが輸送船で貨物積込みで船中の部屋は、アグラで入れるくらいの上下しかない。貨物なみの様態であった。

軍装を身につけた姿は一人八十五キロくらいはある。五、六百人の兵隊が乗っている。北支へ着くまでには船は東支那海を通過せねばならぬ。そこは海が特に荒れ二十メートルくらいの浪があると聞いている。間もなく通るのである。波が段々と大きくなり、船の「揺れ」が変り、上下になる。前の者は山上に、後の者は谷間に入る思いがしてそれもつかの間。軍歌の輸送船の歌、

アアどうどうの輸送船
手柄立てずにおられよか

も急に休んだと思うと、早や船は東支那海に差しか、

っていた。兵隊全員というほど、酔っていた。そして吐く、あげる。顔はまっ青になっていた。夕食になっても一人として食事する兵隊もなく過ぎた。五哩^リの右左には警備の逃視船^{タツシブネ}が三隻も守っている。やがて、十月十七日、摺^ヅ沽^カに上陸して天津に着いた。自分の身分は歩兵九連隊第九中隊であった。

片桐部隊に補充し、支那派遣軍総司令官陸軍大將松井石根、師団長陸軍中將 中島毛吾、旅団長陸軍少將 草場隊長大隊長、陸軍少佐 富山隊長、中隊長 奥村陸軍大尉、小隊長 陸軍少尉 高村隊長である。

同年十一月二十六日、無錫附近の戦闘に参加し、その時某山上に中国兵が十数人陣地を占領しているとの事、我等一分隊夕暮を期し、その山の麓、五十メートルの附近までたどりつき潜伏したが、中国兵に察知される。彼は手榴弾（手木付）を上から投げ込まれ支木がついているため、日本の手榴弾とは二十メートルくらいよく投げられるので、六十メートルくらいが殺害域で間断なく飛んでくる。弾は大きいので速度も眼に見

えるため、右に寄せたり、左に寄せたりして夜明まで五時間継続戦闘したのであった。同年十二月九日から十五日まで、柴金山戦闘に。南京戦城内戦闘ここは到る所に地雷が敷設してあり、日本の将校や馬が戦死した。またこの戦闘は中国兵との接面し入り乱れた戦闘で、もう最後だと心をきめたこともあった。南京攻略すれば、附近の城壁には数百人の中国兵が戦死したのであった。

その後、当部隊は漢国漢国へと進攻作戦で千里の道を谷越え山越え戦闘をしつつ、その戦闘の間には、マラリアと言う疫病に（体温四二度）との戦いも大へん辛いものであった。それがため漢口へ一番乗りした兵士五名であった。皆マラリアでやられてしまったのである。その後漢口と武昌、漢陽等の警備に五か月ほど従事した。昭和十四年七月十一日復員下令、八月九日宇品港上陸、二十一日召集解除となる。

（大住在住）

次代の平和のために戦った戦友への讃歌

平野 隆 虎（七二）

一、昭和十八年七月二十二日、南海のきびしい日ざしが照り返す太平洋上をラバールから北に向けて進む四隻の船団があった。

この時期は、ちょうど一年前に日本海軍が真珠湾奇襲攻撃の戦果をさらに拡大しようとして計画した「ミッドウェー海戦」に大敗し、多くの戦艦や空母を失い南太平洋方面の制空権も制海権も逐次米軍側に移りつつあった。さらにこの船団がラバールを出港する三か月前の四月十八日には、南方第一線を視察中の連合艦隊司令長官山本大將がソロモン群島に於て戦死すると

いう悲報が伝えられ、太平洋戦争の先行きにいいよ暗い影を落しはじめていた。

我々を乗せたこの船団は出港翌日の夕刻、米軍潜水艦による攻撃を受け二隻の輸送船は一瞬にして猛火に包まれて海没した。ウエーキ島増援の任務を受けていた歩兵一ヶ大隊と独立戦車隊の生存者は、戦車・火砲・車輛等すべての装備を失い身体一つで太平洋の波間に長い一夜を明かした後、二十四日の朝護衛の水雷艇「ひよどり」に救助され、その後トラック島―クエゼリン島を経由して九月一日にようやく目的地ウエーキ島に到着した。

二、ウエーキ島は東京の東南約三千二百キロ、ホノルルの西南約三千七百キロの中部太平洋の真直中にある馬蹄型の長細い孤島で面積は僅かに十平方キロ、元アメリカの領有であったが、第二次大戦の頭初に日本軍が南方進出のための重要な飛行基地として利用するために占領した。しかし私達がここに上陸した十八年九月から終戦に至るまでの二年間に米海軍は、この島に

対し強力な機動部隊による包囲攻撃を八回も行い、その上連日にわたり大型機による爆撃と視察を繰り返したためにウエーキ島の戦略的な価値は封鎖されたまま終戦を迎えることになった。この間、十八年十一月下旬には、ギルバード諸島のトラワ・マキンが玉砕し、さらに十九年二月にはウエーキ守備隊の上級司令部が在ったケゼリン島（ウエーキの南約六百二十キロ）が玉砕して、この時から島は完全に孤立状態に陥った。

全土がさんご礁の石ころに覆われているこの島では一切の農作物は育たず、食糧の補給は本土からの潜水艦に頼る他に途はなかった。ウエーキ島における戦没者と戦後の資料によれば陸海軍合わせて三千二百十九柱と記録されているが、これは当初の守備兵力の半数以上でありその大半は食糧不足による栄養失調症であった。戦後ウエーキ島が「餓死の島」として有名なになったのはこのためである。

三、昭和二十年六月頃はもう誰の目にもこの戦争の先き行きが明らかになって、いっどんな形で終結するか

て海に出て行ったまま再び帰って来なかった。そしてその数日後にM少尉も症状が悪化して遂に還らぬ人となった。

ウエーキ島では薪の入手が困難であったために戦死者が出てもその遺体全部を茶毘に付することができず、右腕の肘関節だけを外して遺骨をとり他は土葬にしていた。私は軍刀でM少尉の腕関節を外しながら、故郷にある恋人に思いを残したままこの南海の孤島で無念の最後を遂げた彼の青春を想った。それにも増してK上等兵が、M少尉の誕生日を祝うために衰弱した体力でさんご礁の潮の流れが早いことはよく承知しながら、そこに一尾の魚を求めようとした彼の心情を察して深い動哭を禁じ得なかった。

今私は、遠い思い出となってしまう当時の記憶を掘り起しながら、あの苛酷な戦場の環境の中で多くの戦友達が示して呉れた悲しいほどにやさしい思いやりの行動の数々に改めて感銘するとともに、「人に対するやさしさや思いやりの心」を全世界に向けて発展させ

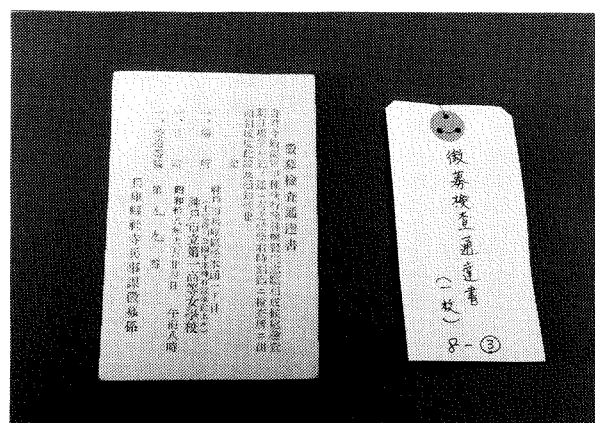
に一般の関心が集った時期であった。ウエーキ島の陸軍部隊でも潜水艦による食糧補給は前年の年末以来断絶えて、一日の給食量は小さな乾パン二十個が支給されるだけになり、将兵の別なくほとんど全員に栄養失調の症状が現われていた。

体重は半減し手足の間接だけが突出してやせ細り、戦闘配置に就ける人員も半数以下という極限状態まで追い込まれていた。

島の水際防禦陣地の一角で守備任務に就いていたM少尉が重度の栄養失調にかかったのは、ちょうどこの頃であった。彼は大阪の出身で大学卒業後に入隊し、七期の幹部候補生として採用され任官の直後にきれいな恋人を残したままウエーキ島に派遣された予備役将校であった。そして彼の伝令兼当番を勤めていたのは同じ大阪出身のK上等兵であった。M小隊長が日毎に衰弱する様子を心を痛めていたK上等兵は、M少尉が二十三歳を迎えた誕生日の当日「小隊長の誕生祝いに尾頭付きのご馳走を採って来るよ」と戦友に言い残し

ることが、新しい世界国家時代の平和を維持するために一番大切なことではないかと考えさせられている頃の頃である。

（河原在住）



徴募検査通達書。これ一枚で戦地へ行かなくてはならなかった。

員数あわせ

宇田 元 茂 (六九)

一、員数あわせ

昭和十八年十二月一日学徒（大学生）動員のあと、十五日に大阪の中部二十二部隊（歩兵第八連隊補充隊）へ現役入営する。

軍隊では第一日目はお客さんである。今まで着ていた服を脱いで軍服が支給される。軍服に着替えた瞬間、すべての人間は個人を失った人間の集団となり、また階級章によって格差が示される人間となる。軍隊は襟章につけられた金筋と、星の数がものいうところである。いよいよ「娑婆」（軍隊から一般世間をさす）とも

容赦なくやり直し。またもや練兵場何周せいとくる。その間「飯あげ」があるから、うかうかする時には朝食にありつけない。

入隊して五日めの朝、点呼前にそつと起きて、厠へ行こうとすると略帽が見当たらない。「やられた／＼」。軍隊というところは、員数を揃えることが必要条件で、新古を問わず損傷などは問題ではない。形があればよいのだから、どこかの隊の者が盗まれたので、員数をあわすべく実力行使をしたのだろう。官物を何かの機会に失うと、とつてもない譴責が待っているため、それを逃れる手段として、他隊の物をこまかしてくるのである。これを軍隊語で「員数をつける」という。盗まれたことを知った被害者は前者と同様、他の者の物をねらう。かくして連鎖的に盗難事件が隠密裡に進行し、最後の者が暴露して、ピンタを喰い泣くことになる。

二日前、他班の一人が洗面している間に帽子をとられ、のめのめと無帽のまま内務班へ帰ってきて、初年

お別れだ。

入営前は夢想だにできなかったことであるが、たかが下士官と考えていたものだが、たいした権力をもつ。上等兵や古兵にも絶対に頭があがらない。『上官の命は朕（天皇）の命令である』と軍人勅諭にあり、口答えや申しひらきはないと痛感した。ある本に総領事干葉皓氏（石橋湛山の女婿）が二等兵で入隊し、早口のため「上等兵殿」という「ドノ」が明瞭でないため、大変いじめられ、殴られたことが書いてあったが、年配の総領事でも無知な上等兵にどやされるのだ。

起床ラッパが「オキロ オキロ ミナオキロ」と鳴りひびくと、初年兵の忙しい日課が始まる。毛布を一分のすきなく折りたたんで、隣の戦友と一線に揃え整頓のうえ、服装を整え、その間わずか三、四分で前庭に整列する。これが早い者順で、遅れた者には広い練兵場一周の駆足罰が待っている。点呼後、助手が毛布や枕等の整理整頓を点検し、悪い者はひっくり返され

兵係上等兵に、いきなりぶんぐられていた。上等兵はふらりと出て行ったが、ものの五分もたたぬうちに戻ってきた。上衣の下に帽子を持っていた、それを初年兵に渡し、「今度盗られたら自分で、ほかの奴の手に入れてくるんだぞ」と、どなられていたのを見た。

古兵や下士官は困ったことがあれば相談せよと言う。員数外のいろんな品物を隠し持っているが、簡単に許して物品をくれない。満州では実弾や手榴弾のほか、軍の秘密兵器になっているガスマスクまで、員数外を持つているのを見て、軍律のきびしくやかましい軍隊なのに、どうなっているのだろうかと思ったことがある。

さて自分の場合、員数あわせに実行するより仕方がない。成功して盗られた者が泣く立場にたとうとも、我が身の災難を避けるためには断行するしか方法がない。あまり近くの中隊だと気がとがめるので、離れた中隊の兵舎に、眠っている戦友の帽子を黙って借り、厠より帰ったふりをして、不寝番のすきを見て忍び入

る。手近かのを無我夢中で手づかみして逃げ去り、素知らぬ顔をして点呼に出た。

入営して早々、国民学校の教師の身でありながら、生れて二十一年、他人の物を盗んだのはこれが最初で、その日一日中、後味が悪かった思い出がある。

二、捕虜への刺突

ここは満州国東安省鶏寧県尚志屯の中隊駐屯場である。忘れもしない十九年五月二十七日、海軍記念日の夕方のこと、「中隊本部のY曹長殿のお呼びだ。行ってこい」とK班長に言われ、Y、Oと自分の三名の初年兵が帯剣執銃で出頭する。

満人のスパイらしい者が、作戦地内に潜入したので、捕えるため指名されたようだ。数班に別れて、潜伏し通過すると考えられる地点に、徹夜で待ち伏せをするのだが、古兵の不足と経験をつむため幹部受験組が指名される。

小銃に実包を込め着剣する。ぜんごう六十発はずつ

兵舎より少し離れた地点に行く。そこには黒い綿服を着た二人の満人がうずくまっており、彼等の前に不気味な穴が掘ってある。

「皆聞けッ、ここにいる満人はソ連のスパイである。一昨晚逮捕したッ」。教官はここで一段と声を張りあげると「只今から銃剣術の刺突演習をするノ」と宣言した。よく見ると自分等が捕えた物である。我々は蒼白な顔を見合せていると、二人は兵隊の差しだす老酒を飲み、ゆったりとタバコをくゆらし、観念したのか悠然として、その態度はふてぶてしいというより立派である。目隠しをしようとすると「不要」と言う。

やがて呪わしい悪夢のような出来事が始った。我々は捕虜をとり囲むよう二列横隊に並ばされる。捕虜たちは荒縄で縛られた両手を上げ、我等の前に立たされた。

「幹部候補生志願者、前へノ」、率先してやるべきことではないので、十一名スゴスゴと悪いことをした子供ののように、二列縦隊に並ぶ。

しりと重い。古兵のU上等兵が同行。初めての行動地、おまけに夜なので方角がさっぱり分らない。黙々と現地に着くと私語の禁止と禁煙である。静粛にしていなと、張り込んでいることが逃亡中の満人に判るため、当然と思われる。が黙して耳の神経をときずまし、待機するのは疲れる。殺すよりもなるべく生捕りにせよとのことである。

夜半二時頃、かすかに忍んで歩く気配を感じ、曹長を見るときなずいている。三名をそつと揺すり起こす。銃は安全装置をかけているので、それはずすと「カチッ」と音がする。そのまま姿勢を低く飛びかかれる体勢で待つ。万一味方だと同志討ちになるので「誰カッ、誰カッノ」二度誰何する。案外無警戒に近づき返事が無いので、銃の床尾で腹や背を殴ると屈んでしまった。夜明けに中隊本部に連行して、その日の教練は休みで就寝を許される。

その翌朝、朝食後突然営庭に集合を命ぜられ、服装は執銃、帯剣である。訝かりながら班長引率のもと、

「ぐずぐずするな。構え銃ッ」

「前へ、前へ、突けッ」銃剣の先は肩先に入り、「アイヤノ」と捕虜の口から洩れる。

「何だノその突きかたは、やり直しノ」

「後へ、続いて突けッ」。よろけながら絶叫する満人の服の下から、ポタポタと足元に血が滴り始めた。荒縄を両脇から引つ張っている古兵も、青白い顔をひきつらせ、額に汗が滲んでいる。次に自分の番がきた。

「宇田二等兵、しつかりせい。前へ、前へノ突けッ」。両腕を無意識に前へ突き出すと、スツと何の抵抗もなく入る。満人は眼をしつかり閉じている。突然、眼の前が暗くなってふらつくと

「こらッ！ 早く抜けッ」「はいッ」。夢中で後へ下がる。あと二名が続けて刺突が繰り返えされる。吐き気と目まいで息苦しい。Y曹長が苦痛にいがむ顔の側頭に拳銃一発。

二、三日寢床に入り眼を閉じると、当時の状況が去来し、なかなか寝つかれない。敵対してくる者なれば、

こちらでも殺られるので仕方がないが、如何に体験訓練とはいえ、無抵抗者を殺すという、受けた衝撃はきつかった。

三、初年兵には地獄の夜の点呼

自分の初年兵時代はソ満国境で過したが、肉眼でソ連兵が見えた第一線である。部隊は第十四連隊。この連隊は明治の始め、乃木少佐の率きいる田原坂の戦いで軍旗を奪われ、再度拝受された唯一の連隊であった。軍隊では朝夕の点呼は、欠かすことの出来ない日課であるが、就寝前のほうが初年兵にとって恐ろしい。十分前になると、週番上等兵の「点呼——」の連呼のあと、将校の週番士官が下士官をつれ巡回にくる。班長が人員報告をすると士官は他班へ。その後が大変である。一日の反省、明日の予定や訓示のあと、毎晩何かの検査がある。帯剣、防毒面、飯合、編上靴、雑のう、襦袢や袴下の洗濯状況、小銃、擲弾筒の手入れやその番号、軍人勅諭、不寝番規則などの暗誦と様々で

「そいつを頭にかぶり、各班まわりをしてあやまつて来い！」

各班まわりとは小銃・軽機の班へ出向き

「今夜、ボサーツとしていて、頭に枕覆いが止まりました。許してください」

と口上を述べて頭を下げる。恥ずかしいやら情ないやらで、他人事ながら胸が痛む。そして後で何発ビンタがと心配である。ビンタの肉を打つ嫌な音が聞えると、耳を覆いたくなる。殴られてもすぐ不動の姿勢をとる。一発頬にくらうと、目に火花がとぶ。

また、他班から上衣のボタンに金ダライをぶらさげ、薬室掃除棒で叩きながら廻ってくる者がいる。まさに百鬼夜行である。特に小銃の手入れ不良とか、引金がおちていないで「カチツ」と音がしたら大変だ。

「お前等、陛下よりお預かりしている大切な兵器をなんと心得ている。このバカが……」

ビンタ数発のあと、銃にお詫びしろと命令される。そこで

予想がたたない。

例えば、牛蒡剣であれば銃口に着剣する所の隅に、土やゴミがついていないか、中身や鞘が錆びていないで油が塗られているか。編上靴であれば皮革油が適当に塗られ、靴裏の鉄釘が抜けていないか、土が着いていないか、靴紐が汚れていないかなど、両手で胸の前に靴を持って点検を受ける。手入れが悪いと紐を結び、首からぶら下げ叱責をうけるのだが、助手や初年兵係上等兵の腹の虫の居所が悪いと、他班まわりをやらされる。

「枕覆いにチョークで魚が書かれているヤツは廊下に並べ！」

と初年兵係上等兵が怒鳴る。数人が並ぶ。

「魚は水を欲しがっているんだ。それがわからんのか！ この贅六ども！」

上等兵の腕が伸びいきなりビンタがとぶ。魚の意味を早くつかみ、洗濯をしておけばよかったのだが……。あとの祭りである。

「九九式歩兵銃殿 自分は手入れをおこたつて（引

金をおとさないで）申しわけありません。今後絶対にこのようなことをいたしませんのでお許しください」

と「棒ヶ銃」の姿勢で言う。上等兵は

「銃は許さんと言っている。そのままの姿勢でいろ！」

と銃口に鉄帽をかぶせたり、「立テ射チ」の姿勢のままにしておくので、時間が経つと、腕がだるく段々銃が下ってくる。と

「こらッ！ 銃がふるえて泣いているぞ。しっかりせんか」

罵声がとぶもとりなすわけにもいかず、一同息をのんで嵐の過ぎるのを待つばかりである。また「鶯の谷渡り」というのがあり、罰として命令されると、ベツトの下枠の棧を手と脚で次々と渡り、「ホーホケキョー」と何回も声を出す。声が小さいと「聞えないぞ。もつとどっかい声で鳴け！」とどなられ、良い声で上手に鳴くと「いいぞッ、もつと鳴け。もつと鳴け！」。

いずれにしろ初年兵いじめの順送りとはいえ、古兵

は喜び楽しんでいる。軍隊は人権人格の尊重など、ひ
とかけらも見当らない別世界であった。

四、終戦前夜の空襲

昭和二十年八月十四日、夜になって群馬県高崎演習
場へ出発する。部隊は九十九里浜に上陸するであろう
米軍を迎え撃つ、青葉三〇四〇五部隊決戦兵団である。
山形で新設師団を編成し、埼玉県の熊谷を中心に駐留
していた。真夏というに昼は寝て、夜は利根川原で訓
練に励んでいた。

わが第四小隊は兵三十名で、九二式重機が二挺あり
歩兵中隊に属する。訓練の最後の仕上げをするため一
週間の演習参加である。

夜とはいえ八月のこと、暑さきびしく、身体中から
汗がふきだし、襦袢や袴下がへばりつき気持ちが悪い。
完全軍装で道は丘陵地帯に入る。民家の傍を通るとバ
リバリ、バリバリと音がするので訝がったが、蚕室で
蚕の桑の葉を喰う音と判明。音の大きいのに驚く。民

家は燈火管制で暗闇、僅かの星明りで前を行く者や道
路を識別して歩く。制空権がないので空襲を避けるの
と、九十九里浜への部隊展開に備えての夜行軍である。

高崎市外の丘陵から補装道路へ、そして渡河のため
橋へと下りつつあった。十一時半頃であつたろうか。
爆音らしい音が聞えたと思うと、「ズドン バリバリノ」
と鋭い炸裂音が上空に鳴りひびいた。と同時に市内中
央部と思われる空が「カァッ」と赤い炎を反射。

空襲警報も出ていない。全く不意の攻撃だ。やがて
B 29の爆音が夜空をゆるがし、花粉のように焼夷弾を
ばらまくのが見える。ザーツという雨のような音をた
てながら、投下されたかと思うと、一斉に地上から火
焰を吹きあげ、高崎市街は炎に包まれ焼土と化してし
まった。最初飛来した一機は先導機で火災をおこし、
目標を僚機に教えたのだろう。

部隊は丘陵で休止し、焼土化するのをなすすべもな
く眺め、B 29の去るのを待つ。兵は秋田・山形県の初
年兵で空襲の経験もなく、目前に大空襲を目撃し言葉

抱きあつたまま、黒こげになって銅像のように見える
母と幼児の姿。全身を包帯でまき目鼻口だけ穴のあい
ている人、焼跡に茫然と立つ人……。それ等の姿は戦
争の悲惨さを、改めてまざまざと見せつけ、自分の胸
をしめつけた。

兵達は始めて見る焼跡の悲惨さに、血の気の引いた
顔をこわばらしている。もはや、前線も銃後もなくな
ってしまったことを思い知らされた。

道路に垂れさがった電線と、焼夷弾のおびただしい
葉莖で足の踏み場もない。それにしても終戦の前夜、
このような空襲に会い、市街ほとんどが、潰滅にさら
されるとは誠に気の毒としか言いようがない。ジリジ
リ照りつける太陽の下を、目もくらむような感じながら、
流れる汗をふきふき、心で合掌しながら行軍すると、
見渡すかぎり余燼の立ち昇る焼野原が続いている
……………。

大隊命令で二個中隊約五百名ほどが焼跡の片付けや
救護に協力すべく残留したことを、演習場に到着して

も出ない。少したつて市に通じる約百メートル位の橋
上を通過していた時、不意に「シュルシュル、ヒュー
ン、ガチンガチン」と十メートル先の路面で青白い火
花が散る、と兵が四散するのが見える。言いような
い恐怖感が湧く。かぶりを振ってそれを払いのけ、部
下を目で探し追う。B 29をわが戦闘機から護衛するた
め飛来してきた艦載機グラマン三機が、B 29が帰航し
た後、わが部隊を発見し掃射したらしい。兵は橋上の
こととて逃げる場がなく、橋壁にへばりついて伏せて
いるのが見える。「重機の位置 ここノ 対空射撃用意
ー」と橋の中央で射撃体勢をとらそうとするも、始め
ての敵弾下でもたついている。グラマンは再度機関砲
を見舞った後、燃料不足か弾丸が尽きたのか去ってい
った。小隊に集合をかけ点呼すると戦死傷者もなくホ
ッとする。

朝早く、まだくすぶり続けている市内に入る。水を
求めて半死半生でうめいている人間。道端に丸太のよ
うに転がっている、男女の見分けさえつかない焼死体。

知る。

(薪在住)

私の新兵記

佐々木 成 信 (六)

新兵教育

昭和十六年当時の国内は、まだ平穏な日々でしたが、神社仏閣には戦勝祈願の風景が多くなってきました。昭和十七年五月、舞鶴海兵団に志願兵として入団し、海軍四等水兵として新兵教育を受けることとなります。教育方針は、すべて実戦主義で学課も実地訓練も「教科書も参考書も戦地にすべて無し、有る物は自分の頭のみ」が、合言葉の即く実戦の訓練の明け暮れの毎日でした。

昭和十六年十二月八日、日米開戦からの海軍の戦果

は新兵教育に最大の好材料で受け身の新兵には酷いものでした。八月中旬、長田野演習場で行なわれた敵前上陸大演習など死者を出すほどの悲壮なもので、いま思えばその時すでに舞四特要員であったのかも知れません。演習では攻撃軍は上陸地点からあらゆる敵との遭遇を想定しながら敵陣に対して総攻撃を加えるまでの訓練を、防衛軍は陣地を構築し、前後左右に尖兵を出し敵の攻撃にそなえる訓練を行います。当日は近年にないあつい日で、苦しい演習となりました。本来敵地に向かって地形の状況変化など確実に知る軍が出来ないので、演習であっても状況説明を加えないのが原則のようですが、私たちの班長はすべてを話してくれたので当然の成り行きとして、説明の通り訓練が進められました。最終的に当日参加した新兵全員の中より七名の日射病患者が発病し、三名の死者を出すほどの実戦に近い演習となりました。

南方方面〇〇作戦

九月一日付舞鶴第四特別陸戦隊〇〇分隊重機関銃班



占領地で使われた軍票

を拝命。陸路横須賀の横須賀港から大井に便乗、一路南下し富士山が見えなくなった時、始めてこれが祖国の見納めかと思いました。トラック諸島春島に集結、毎日繰返される演習が新兵教育の上陸作戦の訓練と全く同じで、なにか不思議に思えました。十月に陸軍の大部隊によるガタルカナル上陸作戦が敢行される。よって舞四特別陸戦隊は背後上陸を敢行し目的の海岸線を確保し陸軍の上陸に援護すべし」と命があり、夜間作戦開始となりましたが、敵機なく無血上陸で野宿の間も無く、指定方面に夜間行軍となり、明け方ジャングルに身をひそめて休息を取るのです。新兵は三度の食事当番があり、思うように休養が取れぬまま二日目の夜間行軍となります。二日目の明け方、休息のため木の下に腰をおろした時、一発の爆弾に見舞われました。気がつくと、全員無事。古参兵の話では死角に入ったそうで、大きさから一トン爆弾のようでした。休息地を移動しようとした時、今度は艦砲射撃に見舞われ、規律もなく一目散に山手へと走っていました。

葉のことを知らぬまま永い飢えと病気の苛酷な毎日が続くのであります。十八年二月転戦という命のもと、いま思えば無事帰国出来ましたが、戦争とは一体なんであったのだろうか、戦争の恐ろしさなど理解出来ないうちが戦争の起こるまでの過程と原因を放置すると戦争はまた起こる。大切なのは何にか一考を要すると思います。

別記

ガタルカナル島からラバウル、サイパン島經由して横浜へ舞鶴警備隊、横須賀砲術学校、上海、青島、マニラ、ニューギニア、シンガポール、サイパン、仁川、舞鶴にて終戦各地で見たものは文化の違いでした。

(草内在住)

した。三晩目の行軍は半分ほどに思われましたが、目的の地であったようです。近くの海岸に重機をすえ、弾薬を少し後方に置き、野営をして当日を待ちます。

当日夜明けから上陸作戦の開始ですが、敵機の爆撃機が銃撃を加えております。我が重機からも火をふいています。ふと海岸を見た時、船団のすべてが浅瀬に乗り上げて兵士は海上に飛び降り徒歩で上陸を敢行しております。上陸用船艇は敵の必死に加える銃撃をさけながら、物資の陸揚げに務めました。海から援護の無かった丸腰の船艇は、次から次へと敵の銃撃にさらされて機能を失って行きます。上陸用船艇の無くなったことを確認すると、今度は爆撃機による船団の爆撃にはいりましたが、動きの取れない各船団は大火災発生となり、次に必死に陸揚げを敢行した。陸揚の物資に爆撃を加えてまいりました。夕闇と共にすべての物資は火災を起し、焼け後から銃弾が左右に飛び散り缶詰がぼんぼん飛び上がる「食糧弾薬は後から送る」の言葉を信じて前進して行った兵士は焼かれた物資弾

国破れて山河あり

中川 克巳（六三）

重大放送

昭和二十年八月十五日正午、このとき祖国の命運は決定したのである。軍国主義の終焉、大日本帝国崩壊の日となった。灼熱の太陽がじりじりと照りつける真夏の正午、私は、熱海海岸の松林にあった旧海軍弾薬庫で作業中、「重大放送」を聞いた。放送は雑音でよくきこえなかったが、しかしそれはあたかも地の底から聞こえてくるような、暗黒の雲間からきこえてくるような沈痛なひびきをもった玉音放送であった。

われ太平洋の防波堤たらん

に太平洋戦争による運命の破局を迎えたのは、それから四十年後の一九四五年（昭和二十年）のことである。

焦土から再建へ

全国の大都市は殆どB29の爆撃によって破滅し、焦土と化した。最後には人類史上初の原子爆弾が広島、長崎に落されたのであった。この大戦中犠牲となった同胞は実に、三百十万人にのぼると報じられている。

昭和天皇の御聖断によって、「ボツダム宣言」が受諾され、終戦を迎えたわが国が、平和憲法の下独立を果たしたのは、一九五一年（昭和二十六年）の九月、（サンフランシスコ条約）のことであった。建国以来未だ経験したこともない外国軍隊による占領下の苦難にたえ、ようやく平和国家、独立国家として、再出発した日本であるが、世界平和への道のりはやはり遠かった。講和条約が締結される一年前、お隣の朝鮮半島において、北鮮軍が突如として三十八度線を越えて進撃を開始、ここに朝鮮戦争が勃発していたのである。そのため、日本駐留の米軍は、南鮮の民主主義を守るため

サイパン島の玉砕により米B29爆撃機の基地を確保され、日本本土はその射程距離に入った。真珠湾攻撃から始まった太平洋戦争は、緒戦の勝利も束の間の夢と消え去り、今や米軍は怒濤の如く本土を目指して押し寄せて来た。祖国の風雲急を告げる昭和二十年一月二十五日、私は海軍志願兵として住み馴れた故郷をはなれることになった。「五尺の身をもって、太平洋の荒波防ぐ防波堤となります」氏神である石船神社境内で日の丸の旗とバンザイの声に見送られて、再び生還を期し難い出征兵士となったのである。

栄光から挫折へ

巨象に挑むねずみの戦いといわれた日露戦争に奇跡の大勝利をおさめたのは一九〇五年（明治三十八年）のことであった。当時、世界最強を誇る陸軍をもつロシア帝国の極東侵略を阻んだ日本は、これにとつて代わり、大陸に確固たる利権を得た。そしてここを大日本帝国の生命線として、一路軍国主義の道を驀進するところとなり、やがて満州事変、支那事変を経て、遂

出動することとなった。日本はいうまでもなく、その補給の前線基地となったのである。しかし皮肉と言おうか再建途上にあるわが国の復興に大きいはずみとなったことは間違いないと思う。

国破れて山河あり

終戦後の八月二十五日、私は再び生還する日はないものと覚悟していた故郷の土を踏んだのである。そして間もなく、閉校される南山青年学校の繰上げ卒業式に当り、作文を書いていた。いうならば卒業論文だろうか。「国破れて山河あり」、私の書き出しは、この詩から始まったことを今も鮮明に覚えている。その日より私はこのかけがえない故郷と、そこに生きる里の人々と、そして家族のために、何をなすべきか。さらにかつてわが身を捧げんとした親愛なる祖国日本に、奇しくも戦争生き残りの一人として、今何を考え、何をなすべきか、と自らに問い続けているのである。

（高船在住）

悲しいビルマ戦記

奥田 為朗 (七)

昭和十八年十二月三日、突如二回目の召集令状が舞い込み、直ちに安方一〇〇四一部隊に入隊した。翌年三月二十七日広島宇品港を一万トンの貨物船の「神州丸」に乗船し、五千人の兵隊とトラック、馬その他多数の兵器を積載し、昭和十九年四月二十八日頃、シンガポールに上陸した。約一か月足らず駐屯し、五月中旬頃、三千トン級の輸送船にてサイゴン（ホーチミン）、ブロンベンを経てタイ国の首都バンコクに上陸する。数日滞在し、今度は割木をたいた泰緬鉄道の貨車に乗せられた。しかし私達兵隊は荷物並みでトラックの下

に積込まれ、本当に苦痛な進軍を強いられた。何時脱線するか、転覆させられるかの危険をおかして、六月一日、ビルマ国、現在のミャンマーのモールメンに到着した。途中割木を燃やしているため、火の粉が飛び散りトラックや兵器に覆いをしているシートに落ち、たびたびボヤに悩まされた。全くひどい旅であった。

再び割木貨車に乗せられマンダレーからシッタウン川の鉄橋を通りサガインにて数日駐屯し、三たび鉄道輸送により、目的地のインドウに六月中旬頃到着した。直ちに敵機を回避するため、ジャングルの中に天幕を張り、露営が始まる。ちょうど雨期のさなかで、毎日雨とマラリアにおかされる。蚊と闘う日々が続いた。私の任務は、毎日日産トラックの中で、陣中日記を書いた。他の戦友は方一線のバモーやミッチーナ方面の戦闘に参加していた。ご多聞に洩れず日本軍の戦果は、思わしくなく九月頃、独特の転進が始まっていた。私達の転進は、全くひどく、有蓋貨車にガソリンをドラム缶に満タンし、その貨車に積み込み、我々兵隊全員屋

根の上に乗せられ、朝露でつるつる滑り、貨車から振り落されそうで、装具にしがみついて数日走り続け、やっと次のメザの鉄橋まで、たどりついた。ところが意外なことに敵の時限爆弾により、鉄橋が爆破され、やむなく貨車とガソリンのドラム缶兵器等を捨てて渡河し、またまた鉄道輸送がはじまる。無残なことには、時限爆弾の直径五メートルから八メートルの穴の中にマラリアとアメーバ赤痢に罹かった。他の部隊の兵士の方々が、息絶え絶にひしめいておられた。しかし患者を収容する機関施設等が無く、私達は涙を吞んで見過し、転進を続けなければならなかった。歓呼の声に送られ妻や子、そして肉親その他肉親の家族に励まされ、お国のためにと出征された、私達の仲間のこの姿全く筆舌に盡し難い光景でありました。

今度は敵機の来襲が、日々に激しくなり、そしてスパイ等ののろしにより、貨車に対しアメリカのノースアメリカン機が飛来し、一せいに機銃掃射が、毎夜の毎く続けられ、生きている心地がしなかった。遂に最

後の空襲により、命からがら貨車から飛び降り、身につけている兵器や装具等を放置し、毛布、携帯天幕、雑囊、飯合、水筒等を持って、散り散り、ばらばらに逃げ廻った。幸いにも私達戦友は、運が良かったのか、戦死はなく、負傷もほとんどせずに、近くのジャングルに待避することができたようでした。それから昼夜を問わず、敵機が飛来し、機銃掃射が行われ、仕方なく毎日夜間のみの行軍が続けられてきたが、遂にメイクテラ街道附近で、イギリス軍の戦車や装甲自動車等の機動部隊に追い越され、ジャングルを求めて逃げ廻り、転進を続行することとなった。途中舗装された街道の両側には、日本軍の日産トラックが、機銃掃射を受けて燃えていた。この姿もまた本当にひどいものであった。約五十日余り毎夜転進し、やつともと渡ったシッタウン川を渡ってサガインの対岸アマナプラに着き、ここで昭和二十年の正月を迎えた。その時には敵機の姿も無く、たまに友軍の飛行機が飛んでいるのが見え、その時の飛翼の日の丸が懐しかった。そし

て戦友達もほえんでいた。

駐屯中にはドラム缶の風呂にはいり、のんびりとした生活が約一か月くらい続いたと思った矢先、戦況がことの外きびしくなり、再度転進が始まった。ちょうどこの季節は乾期にはいつており、雨は一滴も降らず、毎日二五度から三〇度の晴天続きであり、行軍には最適であった。しかし途中これまた敵の歩兵部隊に遭遇し、大砲や機関銃等の攻撃を受け、特に夜間は照明弾になやまされた。時に昭和二十年三月二十七日頃であり、ちょうど内地を出発し満二年目であった。幸い雨が一滴も降らない時季であったので、河川には水が無く塹壕代りとなり、敵弾を避けるのに好都合であった。弾は全く当らなく、友軍には一人の負傷も出なかった。そして約二か月くらい、歩き続けて六月の始めアオクジビヨン（祇園）に着き、ここで遂に終戦を迎えた。

時に昭和二十年八月十五日頃であった。
その後九月下旬頃、インド兵の武装解除が行われ、私達は無条件降伏軍人となり、イギリス軍の手中に落

ち、アロンキャンプで敵の重労働作業の毎日が続き、ほんとうに辛い、苦しい、悲しいことばかりであった。私達部隊の戦友を始め、野戦病院、兵器勤務隊、病馬敵等の各部隊と一緒に七千トン級の貨物船「英彦丸」に七月上旬乗船し、ラングーン（ヤンゴン）港から、シンガポール、台湾を経て、無事全隊が七月三十日頃、九州の佐世保に上陸し、米軍の検査を受け、収容所に二日程滞在し、昭和二十二年八月三日になつかしの京都駅に着いた。

（興戸在住）

私の戦争体験

中川 与一郎（六八）

昭和十八年十二月二十五日、現役兵として京都伏見区藤森にあった陸軍歩兵中部三十七部隊に入営した。当日は早朝より潑刺とした青年達が続々と入営して来た。全員の集合合図に一人一人の名前が呼ばれ、全員異常なきことを確認して、連隊長に報告された。連隊長からの訓示があり、お前たちは、ただいまからは地方人ではない。軍人である。よって軍人魂を忘れてはならないと訓示があった。お前達は本隊が比島にあり、正月過ぎには、本隊に向う予定だ。その間当地が預るということだった。数日後入営者中より五十名ばかり

残留になり、私も混ったここで三か月程軍隊教育を受けていた。

四月二十九日早朝、出発がきまり、我々は船舶兵となることになった。行く先は山口県の下関船舶機動輸送補充隊と云って、新しく設立された部隊である。いわば陸軍の船舶隊、海軍のようなものだった。ここで我等は船上勤務の教育をされ、ようやく、一隻の千百トンくらいの船艇に乗船した。乗組員は全員で、百五十名ほどで、機関部五十名、甲板部五十名、砲備五十名で一世帯のようなもので、私は歩兵出身者のためか、砲備関係の勤務になった。毎日瀬戸内海航行訓練ばかりで、早や年も変り、翌年一月中旬になった。いよいよ内地を離れ大海に出ることになった。目的地は台湾である。船内には装甲車戦車等が積まれていた。この頃より台湾直行は、多少危険な状態になり、無事到着する船が、少なくなった。我等の船は安全を思って、中国沿岸沿いに台湾海峡を渡り、北端の基隆港に無事入港した。始めての外地で大変珍しかった。積荷作業

の間休みである。幾日かして入港中の日本貨物船小型船は、内地引揚げ、又帰る船舶もあった。装備の少い船を護衛して船団を組み、台湾海峡を渡り、中国沿岸まで護衛した。そこで内地向の船と別れ、我々はまた基隆に戻り、次の指示を待つ予定だった。その戻る朝十時頃であった。一機の米戦闘爆撃機B24に超低空で後方より追せきされた。我船監視外敵が友軍機か始めてのことで見分けがつかなかった内に、B24より機銃をあびせて来た。すぐ我々も挑戦したが、もう遅い。死傷者二十名を一瞬にして失ってしまった。時に昭和二十年二月十八日であった。私もその一人で右手右肩右足に銃創受けたが、一命は無事だった。負傷後半月掛けて、ようやく基隆港近くの仮設病院に収容された。その頃、足は片足で歩けず、手は片手でたちまち不自由になった。痛むにつれて三度の食事も出来かねた。その頃より米軍は激しさを増して来て、基隆港内も空襲サイレンの鳴る回数が増し、高射砲爆音の音でさえ、耳にすることしばしばであった。時には防空

も危く感じたが、あの原爆とは思ってもよらない強烈なものだった。我々の同胞も足の不自由、寝たきりの仲間が、あの病院で被爆したかと思へば、目頭が熱くなるばかり。もうこんな戦争は断じて起さないよう念願します。

(興戸在住)

壕で一夜病人だけ過ごした日もあった。もう私は間に合わないと思うと帰還して内地で、一日も早く治療を受けたいばかりでした。ようやく日も過ぎ、病院船の手配が出来たらしく、四月末に南方より引揚げて来る患者と共に戻って来た。内地に上陸したところが、広島第一陸軍病院であった。不自由な身体を窓越しに眺め、外には護国神社の鳥居があった。病室は次第に入院者が増えてせまくなってきた。どうか早く平和の世界に戻してほしいと、毎朝窓外の護国神社の方に向かって祈りするのが、一日の日課のようだった。そうこうしている内に、六月になった。広島病院は、収容仕切れない状態になり、それでも外地より引揚げて来る。私はようやく松葉杖を添えながら自由がきくようになった。歩行の出来る者より移動が始まり、山陰方面の療養施設へと変った。

もうこの頃は内地も非常に警報がきびしく病院内でも爆音が聞える。近くには海軍の呉軍港があり、空襲の的になり、B29が飛来、回数も増して来た。広島市



軍隊用品の一部

戦争体験記

星 正男 (70)

私は昭和十八年一月十日、旭川四部隊に入隊しました。旭川は北海道部隊で、私が生まれ育ったのは豊頃村という所であり、福島県から開拓に入った地であります。現在、興戸に居住し既に三十年の歳月がたちました。当時、私は二十二歳で農業に従事し頑強な体でしたので、甲種合格で入隊しました。尋常高等小学校での教育は、日本国を愛し天皇は神として拝めていたのが当然でした。その頃の思想は、生命をなげ捨てても勇んで進んでいく気持ちでありました。旭川四

部隊では、三か月の軍事基礎教育を受け、四月上旬に下関港から暗闇の中、貨物船で釜山に上陸し満州東トウアン省で本格的な軍事行動に入りました。第四部隊「独立重機関銃部隊」に配属され、約六か月の現地教育を受ける中で、当時輸送機関の要である馬の蹄鉄技術を学び、その工務員として、北支「カイフ」に転属となりました。

その後「徐州」から「重慶」にむけて戦闘に入りました。一晩に十里程進む強行軍を繰返し、多くの戦友をなくす、きびしい戦いでした。約一週間の戦いでしたが、後方支援物資が届かず、中国人から食糧を略奪して、食いつないで前進あるのみでした。この間、特攻隊として四回出陣しました。一回の戦闘で百数名が戦いにいどみ、その都度三分の一以上が戦死し、一番激しい戦いでは八名しか残りませんでした。隊は壊滅状態となっても、再三編成し直おして重機関銃部隊として隊を形成していました。満州に上陸してから二年と数か月が過ぎ、重慶にあと七十里くらいの地で作戦

会議があり、数日間滞っているもとに飛行機からピラが降ってきて日本が降伏し終戦を知らされました。

終戦となり、捕虜生活を七か月間過しました。捕虜生活の食事は、サツマイモの一センチくらいに切ったものを二切れと小麦粉を溶かしたスープのような物に混ぜて食べていました。多くの人が栄養失調にかかりました。昭和二十一年三月頃上海へ護送されることとなり、汽車で移動しました。その時、配給された毛布が二枚、そして戦死した友人の毛布をもって汽車に乗ったが半日毎に汽車が停まり、その都度毛布を出さないと走りださないという状況でした。上海に着いて十日ほど待機させられ、最終の船で日本に帰ることができました。和歌山の田辺港に入港し、上陸した時の感激は生き返ったような喜びでした。しかし進駐軍がジープで市内を走り回っているのには驚きました。汽車で京都に行き、帰還した仲間と別れることとなり政府から支給された約一か月分の給料「十三円くらい」を持って出征地である北海道十勝の地に帰りました。豊

頃村役場に軍隊手帳を返還した後、生家に戻ることとなりましたが、同時期に村から出征した八名のうち、三名しか生きて帰ることができませんでした。農業に欠かすことの出来ない大事な馬も瘦せかけて田畑を復旧するのに二、三年かかりました。元々貧農でしたが、自分自身も兵隊に行く前は健康でしたが、帰ってきてから栄養失調にかかり、目を悪くしました。

二十二歳と二十五歳の青年時代に戦争に参加した日々を回想すると、社会環境や教育によって人間は変わってしまうことの恐ろしさを痛感します。平和と民主主義が強調される現代でも、湾岸戦争にも見られるようにいつ戦争が起きても不思議でない国どうしの摩擦が生じています。互いの立場を理解し、二度と過ちを繰返すことのないよう国民一人々がしっかりと考えたなければならぬと思います。時代の流れで、道徳心も変わりつつありますが家庭生活の場でも命の尊さを伝える必要があります。戦争を体験した人は、特に平和の大切さを後世に伝える必要ありませんし、

これからの時代を担う人達も様々な問題に対して、積極的な考えを持って、共に協調して新しい社会をつくってほしいと思います。日本だけでなく、世界全体が永久に平和が続き、地球が減ぶことのないよう、切に希望します。

(興戸在住)

私の軍隊生活と捕虜の一端

近 本 實 (七〇)

私が出征した時は、太平洋戦争に突入してから一か月程を経て、日本国中が戦勝気分湧きたっていました。大阪北御堂に集結し、久宝寺小学で一ツ星の軍装を受領後、道屯堀川畔の旅館に一泊した後、ピカピカの軍装で、御堂筋を大阪梅田貨物駅まで行軍の上、広島・呉・釜山を経て、北支済南に駐屯の自動車連隊に入隊し、初年兵教育を受けました。内地を出発する時は、既に物資も欠乏し、灯火管制で町も村も暗闇でしたが、済南の街は、ネオンも輝き、平和そのもののようであり、また街頭の店先には、食欲をそそる食物や

雑貨物が、豊富に陳列されているのには驚きました。

内地では羊羹もなかったので、街で買い求め親達に逆慰問をして、大変喜ばれました。入隊前は親戚に軍隊経験者もなかったので、軍隊組織について全く無知で、ニュース映画や新聞で見ていた勇ましい戦闘ばかりと思っていました。ところが一般会社と同様に、事務的な人事庶務経理等のあることや、初年兵の私的制裁のあることも知りました。入隊間もなく身上調査があり、家庭事情、教育程度等について聞かれ、その中で「お前の尊敬する人物は誰か」と問われ、平重盛と答え、理由は忠ならんと欲すれば孝ならず云々と父清盛を諫めたことを言うと中隊長から言下「我が国は、忠孝一本である云々」と叱られました。また初年兵教育期間中に、現況をありのまま家族に通信せよと班長から言われ、莫迦正直に隣の班では毎晩ピンタの音がするが云々と、書きましたところ、点呼後下士官室に呼び出され、ポスト即ストープでその手紙を焼かれ、革のスリッパで殴打され、眼玉が真赤になりましたが、

教官には砂塵が入りこすためと答えたものです。

部隊が関東方面であるため、関西人は言葉の遣い方等々、大変苛められました。自動車の構造に関する教育中に班長が理論的に間違ったことを教えたので、否と反対し、上官の命に逆らったとその反動の制裁を受け「この糞たれ」と思い銃剣術の団陣試合のとき、班長が中に出た時徹底的に突きまくり溜飲を下げたものです。下士官に任官後衣兵団所属部隊に転属し、本部勤務となり、陣中日誌や作戦命令等作戦情報関係を担当しておりました。忘れもしませんが、私の誕生日である昭19・9・26に衛兵司令を下番して昼休していた時、週番司令であるY中隊長に将校宿舎に呼び出され、衛兵司令勤務中の「あること」で首も廻らぬほど殴打され、また背負い投げを食い、貴様が一錢五厘の価値と侮辱された時は、逃亡しようと思ったが、思い止まり、その翌日からそのYには欠礼するとともに朝夕の点呼も出ず、グウタラを決め込み五か月後の二月十一日寒げい古の最終日に銃剣術の試合があり、けい

古もサボッテいた私は、試合だけなら出てやろうと中隊一と評判の高い東北地方の歩兵出身の下士官を倒し、優勝し剣道も準優勝し、Y中隊長はグウタラ軍曹と思っていたが、文武両道を誉められ、過目の私的制裁を謝罪され、その晩は同伴で外出し、盃を傾け仲直りしたこともありました。「将校に非んば人に非ず」という一面があったことは事実でしょう。

終戦間近に本土防衛の目的で、北支より朝鮮に渡り、本土上陸不能となり、北鮮の咸興で駐留し、陣地構築に精励中、終戦となり興南港より東京タモイに騙され、極寒のシベリアに抑留されました。私は男気を出し、内地に還るのは遅かれ早かれ一船の差と部隊の殿となり、本部その他の病弱者三十余名の長を承諾し、鮮満国境で戦闘し、南下してきた敗残兵等の混成五百名の中に編成されました。船に乗った時から奴隷海賊船と同様弱肉強食の集団でした。三十余名は結束して伐採作業に従事し、無事に同時帰国した者は、二十名以下で、栄養失調凍傷で死んだり病院に転送されたりしま

した。私に幸いたことに、鋸の目立て作業（夜間）に廻り、命拾いができました。目立ては収容所外で、二人が従事し斧や鋸を研ぎ終え、澄んだ夜空にオリオン星を眺め、時を計り浅い眠りについたものです。夕食が倍給でしたので、翌朝鋸受領にきた戦友の空飯合と交換し、助けてやり、今でも命の恩人と温かい交友が続いております。毎年の戦友会には過去を忘れ平和な民主日本を喜び合っています。

（大住在住）

自由の束縛

吉田 晋一 (六九)

昭和十一年、小学校を卒業と同時に、商売をやるため、奉公に出る。勤めて三年、仕事の内容も少々わかりかけた時、徴用令が来る。強制的に軍需工場へ連れていかれ、朝の七時より夕方七時までが定時間。休みは第一日曜、第三日曜の月二回であった。約四年間勤めて現役で軍隊へ。私の命は二十五歳まで生きれば上等だと思っていた。奉公に出た時は、必ず商売人になるのだと決意したのですが、徴用令が来た時、私の目標は崩れ去りました。入隊は滋賀県の第八航空教育隊であった。六か月の教育後、中国の嘆息に行く。

付で自分ながら情けなく思いました。敵襲爆撃には何度もあつて来ました。どのようなことになるかと必ず生きて内地に帰れるよう祈っていました。

恐ろしい前線から後方へ戻ることになり、気楽な毎日が一月。ソ連の参戦。そうしてついに終戦二十年八月十九日に、三笠宮殿下のラジオ放送で聞く。生きていて良かった。その時の喜びは今だにわすれません。それも一時的でソ連が入って来てシベリア送り。零下四〇度、風の強い日は、五〇度まで下がる恐ろしい寒さだ。毎日何人もの戦友が死ぬ。食糧も無い。暖房も無い。食事も十日ほどは米の研汁のような物を二百米程度の距離まで取りに行くのに吹雪のため道がわからなくなり凍死する者も出た。特に私の隊は中国の江南省にいた者が多く、防寒具の着け方も知らない者がほとんどであったので大変であった。奇跡的に無事ナオトカから舞鶴港へ。二十二年五月十七日に帰る。

一日千秋の思いで帰った内地。あれも食べよう、これも食べようと戦友と毎日語って楽しんでいたが、着い

その後、第二長沙作戦に参加、毎日泥海のような道を行軍、普通なら一日四十キロ歩くところ、一日三キロか、四キロほどしか前進出来ないような最悪の行軍。敵の飛行機が来ても逃げる場所も無い。食事も休むことも出来ない。ただ無我夢中で歩いているだけである。靴づれの傷には、ウジ虫がわき出てくる。それを取る気力も無い。そのような日が何日続いたことか。どのようなことがあろうとも部隊から離れることは出来ない。離れたら死以外に無い。倒れた者は脈があらうと、なかるうと、戦死扱いである。だから必死である。前進する方角を知るには、人間と馬の死体を目標にして、先発隊の行ったあとには、必ず馬と人間が死んでいる。そのようにして、目的地に着くと同時に、食糧の徴発である。どの民家に行けども米一粒無い。でも「ありません」とか「出来ません」という言葉は軍隊にはないのです。もしかそのような言葉を発言したならば、半殺しにあうことになるのを知っているから私達のような新兵はただ無言で、泥棒猫のような眼

たとたん一瞬の内に消え去りました。約二年間の未支給々料三百円をもらい、なつかしい我が家に帰り着きました。三百円は当時米四キロ買っておわり。

このような馬鹿な世の中にしたのは誰なのか。一時的に生きる希望を失いました。でも一時的な感情であり、あの泥海の行軍、あの厳寒で死んだ戦友のことを思えばと心を持ち直しました。さっそく奉公先へ挨拶に行くが、時代が変わって商売もやめたといひ、申し訳ないが何か自分に合った仕事を一からやるように言われ、戦争が無ければ二十二歳で店を持たしてもらいう約束でその時の資金として保険をかけてくれていたが、満期になっていたので五百円頂く。店を開くどころか、米五キロでおわりだ。でも一日として遊んでいるわけにはいかない。履歴書をポケットに入れ、何でもよい、一銭でも多い職場を毎日探すそのような波乱万丈を乗り越え現在に至りました。

今振りかえって見るならば、多くの戦友が死んだのは、敵の弾丸では無し、ほとんど人間が生きていく環

境でなかったからであった。衣食住足りて礼節を知るという諺がありますが、当時は衣食住無しで、礼節を知れと教へられました。今は夢のような素晴らしい世の中です。自分の目標に向って自由に走ることが出来ます。このような世の中が何百年何千年いや人間が地球に生存する限り恒久平和であるよう祈る思いです。

(東在住)

戦線七年の軌跡

河合 清 (八〇)

(1) 中支にて

闇をすかして低い陵線が見える。バリバリバリ：突然目の前で閃光が走った。地面にしがみつく、右側から砂が降りかかる。チェコ製の敵の機銃が暫く続いて全く静かになった。「ウーッ、ウーッ」といううめき声と、「ゴボゴボ、ゴボゴボ」と泡の吹き出すような音がある。見えない、方角もわからない。誰かがやられたんだ。これが初めての夜襲の経験だった。この戦場で二名の戦死者が出た。数日前に着任されたばかりの小隊長と福知山以来行動を共にしてきた戦友だった。漢

口攻略戦の襄東会戦の時のことである。主な将校行李が到着したのは数日後のことだった。

漢口から上船して揚子江を下り始めた。ノモンハンに参加すると聞かされていた。しかし、大連に着く前に戦闘が終り、輸送船は広島へと進路を変えた。

(2) マレーにて

関東軍で召集を受け、大東亜戦争開戦直後に大連出航。タイ国のシンゴラに上陸して、昭和十七年一月初旬にトラック輸送で敵国英領マレーに入った。国境の山脈を越えて最初に目に入ったのが、あのイスラム寺院の尖塔—ミナレットが夕陽に逆光に光るお伽話の国のような、アロールスターの市街だった。

途中要所に兵站支部を設置しながら、シンガポールまで八十キロ、南北と東西道路の交差するアイエル・ヒタムという村落に兵站支部が置かれ、毎日南へ向う部隊に食事や湯茶の補給で目の回る日夜を送った。

英軍敗残兵も毎日のように投降して来た。彼等を世話して後方へ送るのも兵站の仕事だった。その中に、

マラリアと栄養失調で弱り切った若い兵がいた。すぐ後方輸送するのは無理との軍医の命令で、暫く別室で看病することとなった。片言英語で彼が二十二歳のエジンバラ生れ、そこには母と妹がいると写真を見せてくれた。早く戦争が終って母や妹に会いたいと言って泣いた。その兵は三日後に死んだ。遺品の上に彼のニコリ笑った写真があった。彼の笑顔の下に、日本兵の親切を心から感謝します。神の御加護のありますように。チャルズ・ライズブルックと、死を予感したのだろうか、しっかりとした字で書かれていた。村はずれの丘の上に、母と妹の写真と共に埋めてやった。木の枝の十字架に彼の認識票をぶら下げて墓標にし、日本兵への感謝を記した写真や他の遺品は捕虜と共に後方へ送った。

「紀元節までに」を合言葉にシンガポール攻撃は激しさを増した。その紀元節直前だったと思う。暁の空気を震わす物凄いプロペラ音で飛び起きた。明けやらぬ空一杯に翼に日の丸の大型機が南に向かって飛ん

で行った。とても数え切れない大編隊であった。後でわかった事だが、パレンバン製の油所に降下した落下傘部隊、あの「空の神兵」の華々しい門出の姿であった。

(3) ビルマにて

トラック輸送でジョホール橋を渡り、陥落後のシンガポールを進んだ。けれど休む暇もなく輸送船に乗せられてビルマへと向かった。イラワジ河左岸の石油タンクが黒煙を真上に上げ、正面には、黄金のシユエダゴン・パゴダの荘厳な姿が朝日に照り輝いていた。仏教国ビルマのあまりにも素晴らしい象徴に、ただ尊敬と親しみの嘆息が上るのみであった。

ラングーンから数百台のトラック部隊となって北上した。敵軍トラックが無数に放置されていたが、エンジンの同じ部分が破壊されタイヤは全部破られていた。昼間は各トラックに翻える日章旗の波、夜は火花のようになり前後に点滅するヘッドライト。よくも日本人に生まれたと感激した。ピンナマ↓メークテラ↓マンダ

レーと進むにつれて部隊は展開していった。避暑地のメイミョウに兵站本部が置かれたが、一線部隊はさらに中国雲南省へと進撃した。当時、英米が蒋介石援助のために開いた『援蒋ビルマルト』封鎖作戦である。

インド作戦の開始で国境カレワに進攻のため、我々はマンダレーへ引き上げた。マンダレーの気温は四〇度と体温を越える酷暑で、マラリアが猛威を振るっていた。患者は高熱に加えて高温のため発狂したり自殺する者も出た。

このインド作戦は中止され、我々はラングーンに集結し編成替えとなった。マラリアによる消耗が大きすぎたのだと噂されていた。この編成替で兵站業務は終り、大阪・広島部隊と合併して独立混成旅団南スマトラ守備隊となった。

(4) スマトラにて

パレンバンの製油所は、プラージュと呼ばれるムシ河の右岸にあり、市街のある左岸からは渡し船によって行くことができた。あの空の神兵の門出を見た自分

にとつて、その制圧したこの広大な製油所が整然と活動しているのを見せて戴いたのは本当に、人に倍した感激であった。

葉の仁丹の広告が、当時は大礼服を着た将軍の下にJintanの文字があった。これが、「この将軍が将来助けにやってくる」というインドネシア語の各単語の頭文字になるとかで、街には仁丹の広告がよく見受けられた。容貌も日本人によく似ており、親目的だった。ボランティヤが楽団を作ってパレンバン市内の駐留部隊等を慰問していた。「ブンガワソロ」・「サブタンガン」・

「アッサラマイコム」など現地の唄が団員によって歌われ、その後で「ムシ河の夜明け」というタンゴ調の素晴らしい歌がプリマドンナによって歌われた。二十歳くらいの教養高い美人で、歌も素人ばなれしていた。歌詞は太陽の昇る夜明けのムシ河の情景を大東亜共栄圏の夜明けにたとえた一番と、昔から商港として栄えるパレンバンを、東洋のベニスとたたえた二番とから成り立っていた。通訳に頼んで歌詞を所望したら、

翌日楽譜までつけて届けてくれた。

(5) シンガポールにて

一年くらい後のことだと思う。部隊は昭南島へ移り昭南島防衛隊に編入された。昭南島とはもちろん、シンガポール島の事である。タコツボ作り（塹壕掘り）の日々が続いた。戦況からみて、ここで玉砕するのとは違いかと疑い始めた。

広島への原爆投下のニュースはすぐに広がった。特に広島出身者の多い我々の部隊にとっては大変なショックだった。部隊長による終戦伝達で、戦争の終結を喜びながらも、故国の事の心配が増して来た。

「家族も居なくなった国へ帰る気はない」と言って、夜のマレー半島に消えた広島出身者。何故か自決の道を選んだ将校と衛生下士官。フト、戦陣訓の「恥を知る者は強し。生きて虜囚の辱を受けず……」が頭をよぎる。「かしら右」で始まる訓示もなく、兵の一人ずつに、「御苦労だった」「必ず日本に帰るように」と言葉をかけながらブキテマの丘を下りて行った板垣征四郎

大将、戦犯として帰国する直前のことであつた。

いよいよ出発だ。武装はすべて解除されている。今日の日に備えて身の回り一切は整理してある。四列縦隊で進む。両側には現地人が見物している。嘲笑や罵倒はなかった。彼等は日本兵の捨てるタバコや石鹼を捨てるのを待っているらしい。目的の英軍兵舎に到着、グルカ兵とかいう精悍な東洋系の兵が警備している。

1、官等級氏名を言う。

2、質問に答える。

3、所持品検査を受ける。

以上の結果によって、ホワイト・グレイ・ブラックの三種のキャンプのどれに入るかを分けられる。ホワイトは捕虜収容所入り帰国を待つ。グレイは取調べの後ホワイトがブラックか決定される。ブラックは戦犯容疑者として別に収容される。

質問は日本語の上手な英軍将校が行なった。部隊でどんな任務の仕事をしていたか、故郷はどこかを尋ね

られた。無事通過で白カードを渡された時、緊張がほぐれて一瞬目を閉じた。ホワイト・キャンプへ行くまでにあったグレイ・キャンプには将校が一人、力なく腰を掛けていた。ブラックには誰もいなかった。

(6) レンバン島にて

日本軍捕虜はシンガポール島とスマトラ島の間にあるレンバン島に収容された。すぐ隣島が英軍連絡所のあるガラン島だった。

捕虜収容が進むにつれ、食糧難が深刻になって来た。日本軍の糧秣が与えられたが、米は全くなく一日分として大豆を主食に与えられた時など全員が下痢で苦しんだ。海辺で赤い色のナマコを食べて死んだ者、ゴムの実を生食して死んだ者、皆が餓鬼道に落ちた。

ゴムの実を水だきにして、それを餌にネズミ捕りをした。餌を自分の前にまき、それに寄って来るネズミを木の枝でたたき殺して食べた。空腹のため夜はほとんど眠れず、もっぱらネズミ捕りに費した。近くに三メートルほどの蛇を見つけた。皆で相談したが武器の

ないことと蛇を相手にする自信もなくて断念した。この蛇も数日たつと姿がなかった。餌のネズミを兵隊に横取りされて、他所へ移動したのか、蛇自身が兵隊の胃袋へ移動したのか、これはわからない。

三か月ほどすると、英軍の作戦用食糧が支給されるようになった。縦横十五センチ、深さ五センチほどのアルミの缶で、ビスケット・チョコレート肉類からタバコまで入っていた。英軍の食分だろうが、我々には一日分として支給された。内容品の違う缶が数種あるが外装は同じなのでどれが当るか楽しみだった。支給されると早速開缶し、物々交換が始まる。こんな飢餓の最中でもタバコに一番人気があったようである。

食物が少し楽になった頃、部隊で和歌、俳句、川柳狂歌、漢詩等、何でも文芸作品募集が行われた。いい気になって応募した狂歌二首。レンバン島とガラン島と食い気主題の

◆ 恋飯の島で胃の腑がガラン胸

お蔭で頭の 芯がポーツと

◆ 島中^{じゅう}で 民主シンシュと蟬がなき

飯も食わずに カロリーを食う

(7) かえりみて

1. 昭和十五年、紀元二千六百年の奉祝気分のみなき
る新京ではあったが、毎週金曜日にはノモンハンの
遺骨が到着していた。

平成四・一・二十六付新聞には、ノモンハンに於け
る日本軍捕虜は四百人余、内三百名は帰化し、ロシ
ア国内に生存されている可能性もあるとか。当時、
救援のため漢口から大連に向う途中、事件は終り、
我々は原隊復帰↓復員となった。

2. 昭和十六年、私は現地召集で新京守備隊に入り南
方へ派遣された。同時に生後三か月の長女と、妻と
妻の両親は内地に帰還した。その長女も五十歳を越
え、二人の孫の世話に忙しい。長女と同年輩の残留
日本人孤児の皆様方の肉親を求めておられる姿は涙
なくしては見られない。

3. 最初のインド作戦で国境カレワに向かう途中、急

にスマトラ進駐となった。そしてその後に行われた
インパール作戦では壊滅的な敗戦となった。

私はこの三つをかえりみて、神仏から、余りにも多
くの加護と恵みを受けたように思う。恵みを受け過
ぎたようにも感じる。

残り少い余生は、神仏や社会に対しての、感謝と
奉仕の日々として過ごすと共に、加護を受けること
の少なかつた英霊に対して、平和を誓い鎮魂の日々
でありたい。

(草内在住)

わたしの戦争体験と平和への考え

松原良亮(六八)

昭和十九年一月十日、それは私にとっては戦場への
旅立ちの日でありました。今盛んに噴煙を上げる普賢
岳の麓の島原で育ち、小倉の陸軍造兵廠で勤めた関係
か、入隊は旧満州のハルピンに在った旧関東軍技術部
教育隊通称関東軍第二六三部隊であった。老いた母に、
またなつかしき人々、美しい古里の山河に、もはや再
び相まみえることは出来ないであろうと、私なりの決
意をして指示された博多東公園にて、軍服を支給され、
軍用船で釜山へ、釜山から軍用列車でハルピンまで。
ハルピンの郊外に在る部隊に到着したのが何日であつ

たのか、もはや定かではありませんが、見渡す限り白
一色の広野。マイナス三〇度と聞されたことのみは、
いまでも鮮明に記憶の中に残っています。それから終
戦までの一年八か月は、私は他への転属もなく、次々
に入隊して来る初年兵の教育係としての勤務で、実戦
の場に立つこともありませんでした。そうでありなが
らも日本軍の不利が日に日に増しつつあることは、私
のような一般兵にも認識出来るような情勢でした。

運命的な昭和二十年八月十五日、その時点では、ソ
連の参戦により、各国境を越えて進撃しているとのこ
とで、前日の十四日には、それぞれが破甲爆雷を自ら
の背に掛けて戦車の下に伏せていました。一人一台の
破砕をと部隊長命令を受けており、明日は死ぬ日と覚
悟を決めて戦友と別離の酒をくみながら各自自分の古里
の美しさ、食物の美味しさを自慢しながら徹夜で語り
合ったこと、そしてその状況の中で明日を死ぬという
ことに、何の恐れる心のなかつたことが、自分の心の
中に今でも誠に鮮明に残っております。明けて十五日、

死の準備をしている時、突然の全員集合で終戦の詔勅のラジオを聞きました。身体中の力が抜けて行くような、たとえようのないような状態になった時、前列にいた下士官の一人が前方に走り出て、帯していた拳銃で自らの頭を撃ち、自殺して果てました。私にとって、これが終戦敗戦による悲惨な幕明けでした。十七日には、ソ連軍兵士による武装解除、収容所まで二日間にはわたる行軍。そこで一月余り過して帰国列車と偽られて、二週間余りの列車で最終の収容所のバイカル湖畔のタイセツトの収容所に着きました。シベリアの白一色の銀世界でした。部隊から収容所までの途中で見えた民間の人達の逃避行の悲惨な姿、「兵隊さん必ず敵を討って下さい」といった頭を丸坊主にした女の人は泣きながら叫んだ一言、十人または五人と輪になって中央で、手りう弾を爆発させて果てた兵士達の死体、立木を背にして銃剣で切腹して果てた兵士、言葉では言い表せない。当時のことは半世紀を経た今なお私の心に深く刻みこまれて心が重たくなります。

シベリアに於ける作業は、鉄道の枕木に使用する木の伐採作業。一メートル以上もある雪をかきわけ氷点下三〇度四〇度の中で十分な栄養もとれない中での重作業。昭和二十二年には氷点下六〇度という日も体験。その中で朝起きると隣りの戦友は飢えと寒さに耐えられず、次々と死亡。遺体を埋葬する穴も掘れない凍土の大地。帰国は昭和二十三年十月二十三日。ナオトカで「信濃丸」に乗船して、舞鶴に上陸。二度と見るとは思っていなかった故郷の土。日本は美しく優しいと思いがこみ上がり、万感胸に迫るとはその時の心境でありました。

今、日本は平和です。五十年前のあの悲惨な状況は何なのか。戦争さえなければ幾百万の死もなく、幾千万の父母の悲しみもなかったのです。戦争ほど残酷なものはない。戦争ほど悲惨なものはないとは、日本の誇る哲学者であり詩人である人の大河小説の冒頭にある有名な言葉です。平和とは他人に対して温い言葉を、温い心を、持つことであろうと思います。平和という

言葉は言っているだけで成されるものではなく、一人一人の行動でこそ築かれるものです。どのような大義があろうと、戦争は天魔の所業と断じて私たち庶民一人一人が平和を万代のものになりたいと思います。

(薪在住)

日ソ開戦から捕虜まで

北川 重夫(六)

昭和二十年八月九日午前、私達初年兵は営庭に二列横隊に並ばされた。前列に並んだ者は運転手、後列は助手、自動車運転教育の第一日目である。整列が終わったとたん、兵舎の方からけたたましいサイレンが鳴り、同時に烈しい爆音が聞えた。戦闘機らしき二、三機が、里河の方角から我々の真上を奥地に向って飛んで行った。あわただしく本部の方から引揚げよと命令が来た。日ソが戦争状態になったので元の砲兵として北鎮台の陣地に戻れというのだ。私は二十年三月十日満州国環瑯にある、第六国境守備隊(二六八一六部隊)砲兵第

三中隊に入隊し、通信兵として初年兵教育を受けた。一期の検閲も終った七月、我々砲兵隊は解散して、新たに輜重隊(三七五七二)として編成された。同年兵達も分れ分れになり、大半の者は第一中隊に行き、私は本部付となった。

私が入隊した三中隊には、十糎榴弾砲、十糎加農砲があり、十加は我々の陣地からソ連領内に優に届く優秀な火器であった。太平洋戦局の悪化で、我々の部隊は編成替えされ、重火器は南方へ送るべく環瑯の駅まで搬入されていたのです。幸い駅に放ってあったので、砲にロープをつけ、ワッショイワッショイと大勢の者が引張って陣内まで運んだ。陣地は小高い丘にあり、駅からはかなりの坂道で、きつかったが、我々は無我夢中で運んだ。私は通信兵であるので、観測通信として前線に配備される場所だが、まだ準備が整わなかったので副官の当番を命ぜられ、守備隊本部に命令受領などについて行ったものです。守備隊本部のある北鎮台の中は、開戦と同時に環瑯の市街地にいた軍人家

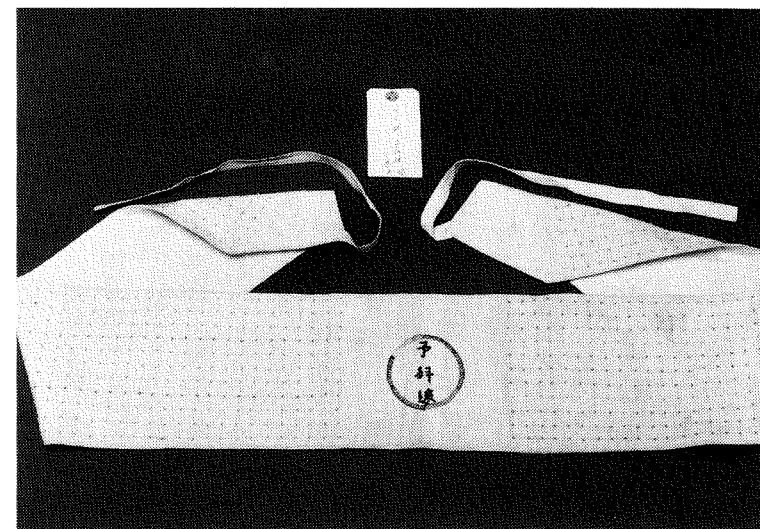
族、一般日本人が全部避難して一緒に暮していたので、それは大変なことでした。平素三千人余の炊事設備のところへ兵と民併せて一万数千人の食事を準備するということで、炊事から上る御飯は、半煮の飯でまともには食べられなかった。アムール川を上陸した敵は、我々陣地への攻撃は避けて、孫呉チチハル方面に通ずる道路を奥地へ奥地へと進出して行った。二三日して私は、歩兵上等兵の護衛付で前方基地の観測地へ配備された。我々の位置は敵の通過して行く道路と砲隊の中間点で、観測班の目測を砲隊に伝えることである。八月十二日から十四日頃、敵の装甲車らしき数十台が土煙をあげて通ろうとした。早速観測の目測を砲隊に伝えた。ドーンヒューヒュードカン我が砲がバンバン打出した。目的地はモウモウとした土煙で、何も見えない。敵の車は全滅したかに見えた。我々は喜んで何台も撃破と後方に電話した。やがて砲撃も止み、土煙も風に流されて、状況がはつきり見えた頃、車は次々と動き出したので、実際には中々当たらないものだと思

った。

そうこうするうち、八月二十三日のことである。我々の基地に伝令が来た。全員山を降りて来い。日本は連合軍に全面降伏したのだ。十五日に天皇陛下の終戦の玉音が放送された。日本は戦争に負けたので、我々はソ連の捕虜となる。皆信じられなかったが、ソ連の兵士を始めて見て本当だと思った。実際には十五日に終戦になっているのに我々だけは知らずに戦っていたのだ。後で聞いたが十九日に孫呉の師団司令部から北鎮台に白旗をもった軍使が来たが、途中の二站を守っていた守備隊長のN少佐に、敵の謀略だと切捨てられたそうです。とりあえず、武装解除され、銃剣等は一か所に集められ、山と積まれた。軍隊手帖、国旗(寄せ書)等は缶詰の空カンに入れて土中に埋めた。ソ連軍の指示で、孫呉まで集合せよということだ。孫呉まで八十キロ、歩いて行く事にした。持物は、乾パン、缶詰の食糧、衣服は冬物の上衣ズボン、防寒用の外套、下着上下、防寒靴、毛布三枚等を持って出発する事になっ

た。これから我々はどこへ行くのだろう。日本に何時帰れるのか。いろいろのデマが飛んだ。先ず耳を切られ、南方へ送られるかもしれない。もう日本には帰れないかもしれない。ともかくいろいろのおもいで、孫呉へ向って歩きだした。思い出はまだまだつきません。

(田辺在住)



千人針。家族や多くの人の願いがこめられていた。

八月十四日のシャベル

宇田 晃(六七)

その日も随分暑かった。真夏の太陽が容赦なく照りつける、昭和二十年八月十四日の昼下りのことである。我が家の焼跡に、私は立っていた。その年の三月十三日の夜、第一次大阪大空襲で家を焼かれ、家族が離散した。そんな辛い思いをした場所である。だが自分の生れ育った所である以上、やはりなつかしい。焼跡を堀り起すだけの悠長な時間は私には与えられていなかった。たまたま布施まで荷を運んだ帰りという、牛車を通り掛ったので、便乗させてもらう。正に牛歩そのものである。千日前通を西に向っていた、人の良さ

そうな牛車を操る老人が言うには、馬は軍に徴発されたそうだ。さらにこうも言った。「兵隊さん、米軍が広島や長崎にどえらい爆弾落しよったが、これからの日本はどないなりまんねんやろ。」私にはなんのこともか、さっぱり判らなかつた。やっと御堂筋に來たのでお礼を述べて牛車から降りた。当時私は二十歳陸軍衛生二等兵歴とした軍人である。身には襤褸ながら戎衣を纏い、竹光の銃剣を腰に下げ、公用腕章を巻いていた。どうやら軍人には見えたらしい。

昭和二十年六月、私は大阪第二陸軍病院に入隊した新兵である。肺結核の兵を収容していた。病院とは名ばかりで、信貴山の旅館をそのまま兵舎と病院にしていた。敷地には二階から顔を出せば、部屋が丸見えという民家が隣接し、疎開学童が居住する宿舍が真向いにあると云う。実に奇妙な軍隊なのである。さりとて、日常の軍事訓練や衛生兵教程等の教育は、熾烈を極めた。また夜の内務班での古兵達のリンチは凄じいもので、全く泣かされた。睡眠中も敵襲とやらで、束の間

の憩いも剥ぎ取られる仕末である。よくまあ皆は耐えたものだ。そんな閉ざされた、塙の中の生活だ。一般社会からの情報等知る由もない。そんなある時、防空壕構築の指令が出た。だが肝心のシャベル、ツルハシといった類の道具が無い。苦肉の策か、十里以内に親戚知人が居住し、道具が調達できる兵は、公用外出を認めると云ったお触れが出た。私は早速応募したのである。とにかく、この疎ましい、塙の外へ出たい一心である。シャベルを入手出来なくとも、ビンタの一つも喰らえば済むと、自分にいい聞かせ、半くば自棄くそでもあった。

幸い空襲を免がれた義兄の家が、天下茶屋にあった。何か月振りかの姉との再会である。お互の健在を喜び合い、母の近況も知った。母は罹災してからは、もう一人の姉の嫁ぎ先である、群馬県の下舎に身を寄せていた。姉はさらに物資の不足特に食糧難を大変嘆いていた。ここで先ほどの牛車の老人がいった爆弾が、原子爆弾であることを、初めて知ったのである。それで

シャベルは、使用されぬまま、しばらく立っていたが、終戦のドサクサで行方不明になり私も忘れていた。ある姉に合って話をしたが、もう記憶は過去の彼方へ遠ざかっていた。姉は八十一歳元気で毎日を送っている。

(河原在住)

も日本が敗ける等思ってもいなかった。何より目的のシャベルを入手しなければならない。切羽詰った大事な仕事がある。姉は知らないというが、物置を必死になって捜した。見事に出て来た。赤錆て柄の抜けそうな代物であるが、シャベルその物である。汗を拭いながら、麦茶を喉に流した。この味は生涯私には忘れられないだろう。その時、辺りの静寂を破って空襲警報のサイレンが、狂ったように鳴り渡った。間もなく爆音と共にB29が銀翼を輝やかせながら低空を悠々と編隊飛行をしている。日本軍は全く無抵抗であった。防空壕に姉と逃げ込み、ラジオを聴く。どうやら森ノ宮の陸軍造兵廠が爆撃され、放送局も危険だと、興奮したアナウンサーの声が流れていた。やがて警報は解除され、私は姉に別れを告げ、赤錆のシャベルを肩に帰隊したのである。このシャベルのお陰で私の身に何事も起らなかったのは勿論である。

そして翌八月十五日、長く辛かった戦争も日本の敗北によって終結した。兵舎の廊下に立て掛けてあった

戦争体験 その生と死

藤井謙治(七二)

私は、太平洋戦争始まって同時に現役で入隊した。外地での活動の一端として「生と死」のその一瞬の奇蹟をここに記し、平和を祈るとともに、親の愛の深さを感じたことを書いておきたいと思っています。昭和十七年、伏見の工兵隊に入隊、初年兵教育を受け、田満州国境へ派遣。零下三〇度以下の厳しい中を陣地構築訓練に明け暮れ、夜間は故郷の空に向って軍歌を絶叫し、耐寒訓練では、防寒具を外すと、見る内に手は変色、眉毛は息で凍結します。黒龍江も凍結し、対岸には露国の兵舎があり、国境の警備に当たっています。

を再び救助されました。

運命はわかりません。このようなことが、三回ほどあり、我々は船舶工兵で常に手榴弾や爆薬を持って、次々の作戦の任務についたわけですが、沢山の惨めな戦いをしつつも故郷を思い、家族をしのびました。終戦後、父の話をしようと意気こんで帰りましたが、父は既に他界しており父の霊が比島まで来て、私を救ってくれたのです。実に不思議な深き親の慈愛に今夜感謝し、平和を祈りつづけています。

(三山木在住)

す。当時は、日ソ友好条約が結ばれていたもので、時折洗濯に来ては互に手を振りあい感無量でした。

半年過ぎた頃、南方行を命ぜられ約一か月、貨車や舟に乗り継ぎ、ひどい戦下の比島マニラに上陸、他の船団は沢山の犠牲者が出ました。奥地で船舶工兵の教育を受け、いよいよインドネシア方面へ南下したので。これからは、敵と病気との戦いです。突然、敵戦闘機の来襲、応戦すれど効果なく、爆弾が命中、船は破壊され心神喪失、その時「謙治」という実に厳しい父の声を聞き、何ともいえない力強い声に「ハット」われにかえる。水を飲み木片をつかんで、海面に気絶して漂っていましたが、父の声に蘇生させてもらったのが奇蹟です。夕刻救助に友軍が来てくれた。常に生死の境をさまよい、「マラリア」「熱帯潰瘍」「アミバー赤痢」とに悩まされつつ、作戦は続行せねばなりません。二回目の時でした。突然、前方に浮上して来た潜水艦の射撃を被り、戦友のうめき声を聞きつつ、舟は破壊され一昼夜経った夕刻、海上にさまよっていたところ

軍隊での思い出

西川 良 造 (七)

徴兵検査を迎えたのは、昭和十三年の七月であった。当日の服装は統一のため、当時青年学校に行っている者は、詰襟の團服を持っていたが、その他の者は折襟の團服を役場から貸った。私もその一人であった。小学校の校庭に整列した。その時いかめしい姿で近寄って来た二人の憲兵が「折襟團服を着てネクタイをしていない者は前に出て整列をせよ」と大声でどなった。十名余りいた、その内の一人は靴下もはかずに新品の麻裏草履をはいていた。憲兵にいきなり軽るくではあるが一人一人片方ピントを受けた。貴様らは今日の日

は何と心得ているのか、徴兵検査というものは男子と生れて一番目出度い目である云々と。今から思えば現在の成人式と思い出している。実際は、その時代の農家では背広服を持っている者は先ずなかった。ネクタイ等はあるはずはない。ノーネクタイ姿が無礼なこととは知らなかった当時である。

数か月して十月になり現役証書が届けられた。「右の者現役兵に徴収し左の通り入営を命ず」連隊区司令官からである。そして後日役場から「祝入営西川良造君」と記した大幟が届けられた。父が朝早く竹を切つて来て呉れた。家族一同表に出て幟を上げた。父の目に何か光るものがあった。これは一家の名誉であると同時に父もよくいった軍隊生活の苦しみの始まりかと思つたのでしょうか。父もその昔軍隊生活を良く知っていた。「俺は機関銃隊だったので応召があれば一番早く戦死だよ」などと軍隊の経験談をよく聞かされていた。明けて一月十日入営した。一期の検閲も終つて野戦に行く者が大部分であったが、運が良かったか、悪かつ

たか、三年近くも内地勤務で過ごした。平時であれば満期除隊の時であるが、元々私は軍隊の飯もあまりうまくなかった一人であり、実際は早く帰りたいかった。折も折、米英のABCD包囲網の外交も好転せず、大東亜戦争開戦の十二月八日を迎えた。その日には既に我が十六師団（京都）は台湾に待機していた。比島リングエン湾に敵前上陸して以来、四年後には武運つたなく傳統ある歩兵第九連隊の軍旗も奉焼しての末路であった。

私は上陸以来、何の武勳もなく明けて十七年一月一日敵と遭遇して左肘関節部に敵弾を受けて野戦病院に収容された。戦った日数は特に少かったが、その激戦の模様を記しておきます。上陸の日、タルラック攻防戦。そして負傷した日。以上三回の戦闘であるが、その間巻き様を取つて寝た夜は一夜もなく、行軍、警備、陣地構築など何時飯を食つたか食わなかったか、何時寝たか、寝なかったかの日々が続いた。初戦の日、私の面前で戦友の〇〇兵長の戦死頭部貫通銃創であつ

た。これは分隊長の責任上危険な前進であつた。機関銃の威力が私は実戦に遭遇してはじめて知つた。二丁の敵の機関銃の集中射撃受けければ約十分間で、大本の小枝、葉は全部飛散り日光が、照りつける。正に「敵団雨霰」というのは文字通りである。凹地を巧に選んで前進するほか、正規の姿勢で射撃等すれば命はいくらあつても足りない。タルラックの戦闘もこのとおりである。二、三発の敵砲弾が炸裂、連隊本部と我が中隊の第三小隊は全滅の破目に遇つた。勿論連隊長も戦死された。敵の不意撃と遮蔽物が無い路上戦であつた。敵との距りは百メートルとない。我が第二小隊は卓越な指揮能力があつた。一瞬早く右手の砂糖きび畑に遮蔽した。しかしこれも数分間で、葉幹が引きさかれて友軍の鉄幅が見へはじめた。幸にして土地が少し低かつたので、我が犠牲者は二、三名で済んだ。我が小隊長は、士官候補生出身の新品少尉である。私は不思議に気が合つて大事にして呉れた、人情味の深い士官であつた。約三十分ほどして敵弾の飛来も急に少くなつ

た。小隊長は少し姿勢を高くして敵状を見た。そして大声で命令を下した。「これより小隊は突撃を敢行する」といって、「第一、二分隊は正面より第三分隊は右の凹地を迂廻し、各自一発の手榴弾を投てき、その爆音と同時に突込め」と「各分隊長は復唱せよ」と、また大声でどなった。各分隊長は直に復唱したが、我が分隊長は復唱しなかった。その時私はああ戦死したと思っていた。隣にいた小隊長は、小声で「西川行くぞ」といって軍刀をすうと抜いた。私は今でもわすれることが出来ない一瞬であり、どっと寒けがした。突撃の命一下、大地を蹴って前進した。私も負けてはなるかと隊長の後から続いた。突込の命一下「わー」と喚声を上げた。その喚声は私の声が一番早かった。これは自慢ではなく、私と小隊長の心の一致であり、平素からの私の信頼する士官であったからである。予期せんところに鉄金網があり、少々迂廻したので一人と殺すことも出来なかった。手榴弾の爆破で十名ばかりの敵兵が壕内にいたが、死傷兵のようであるので、近寄ら

ずに前進した。五、六名が竹藪に逃入だったので、小隊長は擲弾筒に射撃を命じて一応隊の集合を命じ、態勢を整へた。今の数分間、死線を越えた白兵戦での死とは何か、誰のために戦っていたのか、今になって思出すと判断に苦しむ。陛下の御為か、国民のためか「明日の命を誰か知る」という軍歌もあるが、数分後の命が解らない。この歩兵の突撃の兵士達の死線上にある心境は何に例へて良いか。その後二回の突撃で少しの度胸も着いて来た。タルラックの戦手も夜中まで続いた。我が中隊の犠牲者は中隊長以下三分の一を越した。ただ戦死した戦友の冥福を餘世少い私であるが、祈るのみである。永遠の平和を祈って筆を置きます。

(田辺在住)

父と共に海軍で

守 岡 實 (六五)

私は、海軍軍人の二男として生まれました。父は、農家の二男で口減しのためか、若くして海軍に志願し、大正四年から終戦までずっと海軍に籍を置いていました。

海軍基地のあった軍港地を次々と移り、私の小学校時代も四回転校したことを覚えております。昭和十二年七月七日、当時の満州の旅順に海軍基地があり、私の家族が住んでいましたが、早朝、非常呼出だと言って起しに来た水兵と共に駆け足で、乗組艦に帰って行きました。いわゆる、蘆溝橋事件が勃発し、父の艦

も出動して行ったのでした。

それ以来、戦火は上海に飛び、やがて、支那事変、そして、太平洋戦争にと突入していったのです。戦争中、父はほとんど艦隊勤務で、家に帰ることは少なく一度は乗組んでいた軍艦蒼鷹が、潜水艦の魚雷攻撃を受け、沈み漂流中、味方の艦に救助され九死に一生を得たと話しておりました。自宅にも父の戦友や後輩の方が日曜日などよくお越しになりましたが、その多くの方が戦死されました。

さて、私ですが父の後を継ぎ、海軍軍人になろうと思ひ、飛行機の搭乗員を憧れ、最も早くなれる道を選び、当時の中学四年修了と共に甲種飛行子科練習生いわゆる子科練を志願し、昭和十八年四月一日に入隊、中学校の制服からあのスマートだった七つ釦に着替えたのでした。

一年間、陸戦、通信、カッター、体操、武道そして一般学科等海軍軍人として基礎訓練を受け、その後は飛行練習生として半年間、実技と搭乗員魂をみっちり

叩き込まれました。

真夏の炎天下、飛行服姿での広い飛行場周囲の駆け足、毎晩のようにバッテリーと呼ばれた軍人精神注入棒によるお尻への制裁、何しろ私達の教官、教員は、ハワイ空襲、マレー沖海戦に参加し、また、ラバウルで戦って来た猛者達が多く、日夜、なぐられ鍛えられての猛訓練を受け、卒業すると実戦部隊は、水上機の基地串本航空隊に配属されました。

串本は紀伊半島の南端で潮岬と橋杭岩で民謡でも有名なところです。輸送船団の上空からの護衛、敵潜水艦等の哨戒が任務であったが、何時攻撃を受けるか判らず、一瞬の油断も許されない。魚雷攻撃を受け船腹から火柱をあげ忽ち沈没していく船舶を見送り、直ちに攻撃に移ったこともありました。

日曜日などに外出して潮岬灯台に行き、果しなく続く太平洋の水平線を眺め、父は今、どこかの海域で戦っているのだろうか。また、当時、軍の飛行機不時着場だった草原に寝そべって、雲一つ無い澄み渡った秋空

を見つめて、思い出すのは故郷の母で、元気であるだろうかと思うことと予科練の同期生の事でした。

日本最大の空母信濃（戦艦大和、武蔵の姉妹艦で建造途中に空母に変更された）の回航に護衛の任務が与えられたが、その前夜に敵潜水艦の攻撃により、多くの乗組員と共に熊野灘沖に沈んだことを聞き、その雄姿を護ることが出来なかったのを特に残念に思いました。

その後、日増しに戦況が悪化する時、私も他の隊に転勤したが、各基地で特攻隊が編制され多くの先輩や同期の友が沖繩をはじめ本土周辺に米襲する敵艦船に突入、また、敵機と交戦散華されました。共に身の上話や故郷の話を語り合ったよき友が、国家の繁栄と国民の安泰を祈りつつ、末だ童顔の少年らしさが残る友が、煙引く愛機と共に散ったのです。

そして、終戦、私共は生残り焦土のなか、食糧不足と荒れすさんだ世相の混乱期を乗り越え子どもを育ててくることができました。

今の日本は、経済大国といわれ、戦後生れの方も多くなり、立派な車や海外旅行などのレジャーを楽しむ時代ですが、この平和な日本は多くの尊い犠牲によるものです。すでに太平洋戦争が勃発して、五十年が過ぎ、ともすればあの悲惨な戦争と平和の尊さを忘れ去られようとしています。私は決して忘れることなく子供にそして孫に伝えていくと共に余暇を利用し、亡き同期の友の墓参をしたいと思っております。

（田辺在住）

わたしの戦争体験

安田 盛一 (70)

体験を語るまでにまず述べて置きたいことが一つあります。

それは私達小学校時に、既に軍国主義の中で育てられて来ました。即ち男は兵隊に行き国のため、陛下のために死ぬことが日本人として最も名誉なものと教えこまれて大きくなり、日本が国を挙げての軍国主義の体制でしたので戦死することは、何の苦もないように教えられ、如何に軍国思想が徹底していたのです。

昭和十七年徴兵で、現役として昭和十八年三月一日、広島県西練兵場へ集合すべしの赤紙令状で、軍隊に入

った次第です。

兵種航技兵（飛行機の修理）として入隊し、博多港から現朝鮮人民共和国の平壤の教育隊に入隊、三月から五月、ここで銃をとっての戦闘訓練をし、六月から九月、九州大刀洗航空隊で、今度は実技（飛行機の修理の仕方）を習い、九月の末、今の中国の北、満州竜江省の平台にあった第六十九部隊に編入されました。そこには内務班が一班から九班まであり、班の編成は五年、四年、三年、二年と各古参兵が二十人くらいで、私達は四人で、これらの人の面倒をみるしくみになっているのです。食事、掃除、洗濯、身の廻り、総て私達の仕事で、一つ気に入らなければ、なぐる、けるの制裁をうけねばなりません。

特に平台は四十五度という寒さで、この苦労は言葉では表わせません。たとえば便所は総て氷です。大便秘も小便も直ちに凍ります。週番上等兵は、ハンマーをもって碎きに歩き、現地の人は便所の中へ入って、ツルハシを使って固まった氷をもって帰ります。

幸い寒地でしたので、食糧は十二分にいただきました。現地人は黒いコウリヤンの固いパンを二つたべるだけで、みじめな生活をしていました。初年兵時代を厳寒の地平均三十二度の寒さとも闘わなければならぬ毎日／＼が苦しい悲しい連続でした。衛兵に立ち、あの歌の文句にあるように、満州は天気の良い日の夕日は直径一米くらいの太陽を涙で眺めていました。軍隊生活は、初年兵にとっては、内務班が一番苦しいものでした。

幸い厳寒の地では、飛行機の装備等がむつかしいのか、内地宇都宮に帰ることになり、寒さから解放されることになりました。宇都宮から米子と転動し、昭和二十年八月二十二日に家へ帰ることができました。

私達、軍隊生活に大半以上が初年兵生活でしたので、つらいことばかりで、耐えに耐えることでした。

得たものが大きく「何くそ」という根性ができたことは、何物にも勝る収穫だと思っています。

（田辺在住）

戦争体験文

長尾 猛雄 (七九)

五十年前の十二月八日、日本は太平洋戦争の悲劇に突入しました。戦争がどのような、大義名分のもとに行われようとも、大きな犠牲を払うのは、いつも庶民であります。「戦争ほど残酷なものない」との叫びは、永遠に忘れてはならない。あの時の苦しさ、悲しさは、二度と繰り返してはなりません。年とともに、その思いを強くしております。私は昭和十六年七月に召集され、岡山中部五十二部隊工兵隊、渡河材料部隊に入隊いたしました。二十九歳で、妻と三歳と一歳の子供を残しての入隊でした。残った妻子は、筆舌につくせぬ

苦勞をしたことです。戦争の悲惨さを何としても記録にとどめておきたいと思っておりましたところ、このたびの募集を聞いて、久しぶりに、ペンを取った次第でございます。

入隊して次の日に二人で、一台のトラック、(シボレー)をもらい、一週間後に岡山駅より貨物列車で宇品港にまいりました。翌日宇品港より船で満州国大連港に向って大連より牡丹江省や延吉市で、敵前上陸用の舟の操じゅう訓練を受け、その年の十二月に大連港に向っておりました。そして、十二月八日に日米開戦のニュースを聞きました。大連で冬服を返納して、夏服の半ソデ、半ズボンをいただき、輸送船に乗船。何分満州は零下一五度のさむさのため、夏服では寒くてたまりませんでした。三日後に船が動き、行先はわかりませんでした。一週間ほどすると、次第にあつくなくなってまいりました。乗船後一か月ほどで、タイ国のシンガラ港に入港、停泊中に、その夜、敵の大空襲を受け、生きたここちはありませんでした。三日後、上陸し

てマレー半島に向って進んでいましたが、途中の橋は全部爆破されておりました。工兵隊の仮橋で前進、二月十一日、紀元節(現在は建国記念日)の午前〇時を期して、マレー半島の最南端のジョホールバルより敵前上陸の大作戦、上陸したものの重油タンクが爆破され、黒煙で青い木の葉も自分達も敵兵も黒煙で、百米先では敵兵か日本軍か見分けがつかない状態でした。その後マレー半島の各所で警備についておりましたが、十二月シンガポール港より輸送船でビルマのラングレン港に上陸、その夜から敵機の激しい空襲爆撃です。以後は毎日夜間行動で、ベンガル方面の作戦に参加、夜が明けると敵機が頭上を一日中、戦闘機や爆撃機がおそって来るので、毎日夕方から夜明前までの作戦が終戦まで続きました。ベンガル地方の作戦が終り、河を渡ろうとしても、多くの戦友は渦に巻込まれて水死しました。その後、生き残った者は、廻りを金網でめぐらした中でのテント生活。朝から夕方まで英軍の使役をして、二年ほどしてから、やっと日本に帰る日

がきました。日本には、船がないので英軍の船で宇品港に着き、広島長崎の原爆その他本土各地が焼野原になったことを初めて知りました。二度とこのような悲劇や残酷なことをくり返してはならないことを後世につたえて行きたいと思うと同時に、各地で散った友の霊のごめいふくを祈っています。

(松井ヶ丘在住)

従軍の思い出

木口重信(七三)

半世紀の歳月を隔てた今日、当時のことを思い浮かべながら綴ることにしましたが、記憶に誤りやズレがあったり、軍隊用語が出て読みにくいと思いますが、何卒よろしくご判読下さい。さて、私の村では、兵役に関係のない家は極めて少なかったように覚えている。それにくらべ、私の親戚一族の中には兵役関係者がなく、世間に対し肩身の狭かったこと、とりわけ両親はその感を強くいだいていたようであったが、私の浜松高射砲隊への入営がきまり、村の氏神に忠誠を固く誓って以来、家中が明るくなったことを覚えている。

江をのぼる抗日と大書した壁面、生々しい弾痕の跡が眼に焼きついてくる。若い血潮は踊った。始めて見る敵機に緊張を覚えたりしながら進攻を重ねる。第一線部隊に呼応して、衡陽作戦に向け前進が本格化した。洞庭湖畔の陣地で友軍の集結と前進援護に任じていた緒戦に、B25の編隊に遭遇一群射を浴びせた。煙ひく編隊くずれを見て初陣を共に喜び、戦史の一頁を飾ることが出来たのであった。以来、悪路がつづく進撃は夜間がほとんどとなった。

時確か、昭和十九年七月二十九日正午過ぎ、丘陵台地に布陣しての昼食と休息の時だった。敵機影迫る。素早く戦闘体制に入る。半裸の者もそのまま定位置に「五発」が令された。発射音、機銃掃射音や落下傘爆弾の破裂音、爆風等がほとんど同時にやって来、そのうえ土砂の粉塵で視界はゼロ。諸伝達が届かない。これが瞬間の戦いの中で起きただけに視界に捕える不安さは如何にと。しばし待った。見ればあたりには鮮血が流れ、傷つき朱に染まって倒れている者。人肉が飛

「入隊」文字通りの初年兵、言うこと、成すこと、ことごとく間がぬけ、古参兵の氣にふれながら毎日の訓練にはげみ、兵隊らしくなっていたように思う。この間、いま頭に強く残っていることといえば、

- 何事も言いわけの通らないこと
- 一秒を争っての射撃準備づくり
- 夕食後寸暇をみつけての酒保走り
- 夜の軍歌演習……等々。これらを通し、いつも志気の昂揚や意志の統一をはかり、時局の認識を深めた。そうして軍人精神が自から培われ、固められていったのである。

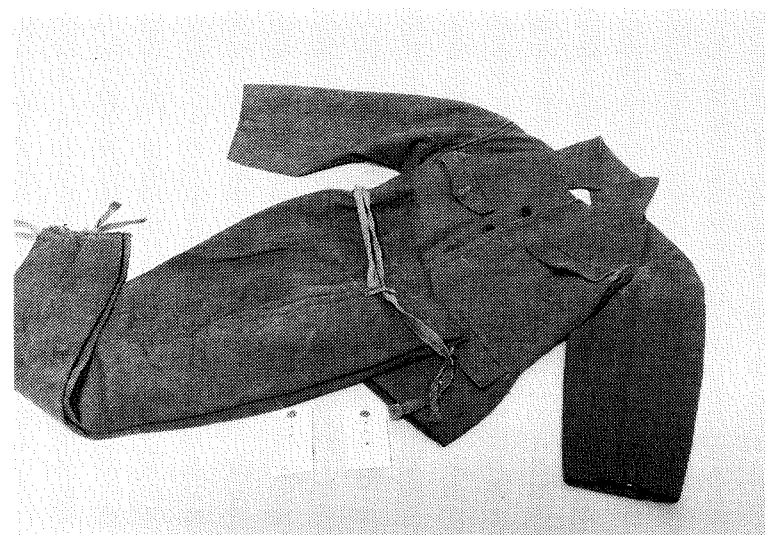
時が過ぎ関東軍特別大演習参加のための部隊編成に加わって、大陸満州の広野に馳せること、約二年有半。ソ満国境を北にのぞんで西に東にめぐるしい移動をしていた頃、日本の戦局は拡大の一端をたどっていたようで、日々の訓練も筆舌にしがたい厳しさが要求されていた。時に昭和十九年、満州の春はまだ遠い頃、中支への戦闘参加のため、南下したのであった。揚子

散、まさに阿鼻叫喚の様相を呈していたのであった。それ以来、あの日、あの時、あの情景は私の脳裡に焼きついて終生忘れることの出来ないものになっている。時は流れる。日本戦線に異状ありの情報が入ってくる。時に昭和二十年の夏を迎えていた。誰もが信じられない知せ。それは日本の敗戦降伏であった。やむなく鉾を収め、祖国再建のために恥を忍び軽拳盲動のないよう祖国に帰って、新しい日本の復興と再建に励むことを一同の合言葉にして、昭和二十一年六月、この足で祖国の土を踏んだ。以来、平和で民主的な国づくりの出来る人間育成に微力をつづけて来たのである。

終りに、中支の戦野で武勲をたて、祖国の礎として散華した今はなき戦友の霊に対し、心から追悼の意を捧げますと共に、遺家族の方が強く生きていただくことをお祈りし、併せて残った戦友と共に、変ぼうの激しい今日であります。それぞれ明るい展望を見失うことなく健康に生き抜いて行きたいものです。

若き日に征きし大陸今日も覚え想い交々

(田辺在住)



軍服の一種。肩や胸の星の数で上下関係を表した。

駆逐艦の轟沈を目のあたりに見て

水山 孝次(七二)

昭和十八年十二月上旬、パラオ島に上陸した徳二八八部隊の移動修理班近藤隊は、ニューギニアの近くまで行っていました。濠北作戦の兵員不足のために、ハルマヘラ島へ配属を命ぜられました。ところが、ハルマヘラ島方面に行く船の便がありませんでしたので、内地に帰る陸軍の上陸用舟艇に乗せてもらって、内地に向いました。船足も早く、三日ほどで内地に着きました。これで除隊出来たらよいがなと思っていましたが、明くる日、また次の船に乗って出港です。内地は大変寒い日でした。宿舎は門司の港の近くの民家に御

世話になりました。南方帰りの兵隊さんと言われまして大変歓迎して戴きましたが、宿舎に着くと風呂も沸かしてありましたので、すぐに入れて戴きました。なんともいえない気持です。パラオ島では暑いので、水浴許りしていました。タオルと石鹸を持って河へ行き、身体を洗い、ついでに洗濯もしました。内地ではいろいろと御馳走を出して戴きました。どれもこれも長い間、口にしない物許りでした。中でもその時、御馳走になった越前煮の味は、一生忘れることが出来ません。夜はふとんの上でゆっくりと休ませて戴きました。

翌朝、朝食を御馳走になり、集合の時間がきまっておりますので、御礼を言って港に向いました。岸壁には次の輸送船が着岸していました。我々の中隊は、タラップより乗船しました。全員が乗込みますと、タラップを上げて岸壁を離れて港を出ました。船は船団を組むために、しばらく停泊していましたが、五隻揃いましたので、一列縦隊になって南下しました。内地

の山々が、だんだんと遠くなり、これが今生の見納めかと思うと、目頭があつくなってきました。駆逐艦が前方の護衛にあたっていました。右と左には、二隻の駆潜艇が護衛していましたが、我々の乗った船は、赤く錆びた貨物船で、便所も無く、船の外板に木で造った風呂に穴をあけた様な物を、ロープでしぼり着けていました。その中に入って大便秘も小便も海に落していました。下を見ると、余り高いのと揺れるので、目が回りそうです。数日たって台湾海峡を通った時、空が黒くなって雨が降って来ました。日が暮れる頃になると、風も強くなり、大シケになって高波となり、船は木の葉のように大きく揺れて、夜は一睡も出来ませんでした。翌朝、夜が明けて波も大分静かになって来ましたので、甲板へ出て見ました。甲板に積んであった橋懸が、二隻ありませんでした。夜の間にロープが切れて、海へ落したそうです。立ててあったドラム缶が、四五本ころがっていました。石油が漏れたのか、石油の臭がしていました。波も静かになって無事、高雄の

港に入りましたが、高雄では、数時間停泊して水及び食料を補給し、港を出ました。

二日くらい経って遠くに青い山が、見えて来ました。それが比島のバタアン半島でした。だんだんと近付くにつれて、山々を見ると、古い砲台のような物が、見えていました。波も静かですので、甲板へ出てのんびりと対岸の山々を眺めていました。あと数時間で、マニラ港に着く前です。船首の方で大きな爆発の音がしましたので、ふと前方を見ると護衛中の駆逐艦の中央より、真白い水柱が立っていましたので、びっくりして、思わず大声が出ました。その水煙が海に落ちた頃、黒い船体は船首と船尾に真二つに割れて沈んで行きました。数十秒の間の出来事です。敵の魚雷が駆逐艦の中央に命中したのです。敵は護衛艦を先に沈めて、輸送船を全部沈める計画だったと思います。輸送船は皆気笛を鳴らして、魚雷の攻撃を避けるためジクサグ航行をしながら、全速力でマニラ港に向かって走って行きました。私は金槌でしたので、あわてて救命胴衣を取

りに船倉に降りて、救命胴衣を着けて小銃を持って甲板へ出ました。日が暮れて対岸の山中より、ちらほらと明かりが見えていました。前方には、マニラの埠頭の火が、明か明かで見えていました。無事港に入り、やれやれと思いました。マニラ港では、二日ほど停泊していましたが、我々修理班は、ハルマヘラ島に行くため、前の船の半分くらいの小さな船に乗替へました。駆逐艦の兵隊さんは、ほとんど戦死されたそうです。戦死された方々の冥福を祈りつつ、マニラ港を出て上陸地ワシレへ向いました。

(三山木在住)

非人間的な内務班

中川 義和 (七)

私の戦争体験といえば、戦前から戦中に何回となく農学校と旧制中学校の教員として、学徒の勤労動員と行動を共にしたこと、短かったが、戦争末期に軍隊生活を送ったことである。後者について述べてみたい。と、いうのは、この僅か二か月たらずの軍隊生活で、私の軍隊観が一変したからである。それまでの私の知っていた陸軍とは、礼儀正しく、端麗な軍隊、日章旗をかがけて、勇ましく進撃する軍隊という外見上のものであった。ところが、内務班生活の体験で、幸か不幸か内面の兵隊の生活は、武士道精神の片鱗もみ

られない非人間的なものであることを知った。さて、私は戦争の旗色が大変悪くなった昭和二十年七月十二日に召集で深草の中部第三十七部隊へ入った。直ちに古い軍服に着替えさせられ、ここは留守隊であることがわかった。従って、いま直ちに戦地へ出動させられることがないので、一まずは気分が安らいだ。一緒に入隊した仲間の召集兵はと見ると、私のような三十年配で身体の悪い者と若い心身に欠陥のある者ばかりであった。なるほど今頃まで召集されずに残っていた者はこんな程度かと、我ながらうなづくと同時に一種の哀愁、大げさにいえば残存兵力に対する一抹の不安の念をもった。

いよいよ兵営生活が始まると、ある程度の予想はしていたが、はるかにそれ以上で、内務班は常識はずれも甚だしい。一般的に人間の生活は昼間は仕事をし、夜は休養と睡眠をとるのが原則である。ところが内務班では、夜の休養が除外されていた。兵営での寝食は内務班単位で行うことになっている。班組織は班長を

頭とする縦型社会で、班長(軍曹)・下士官・兵(兵長・上等兵・一等兵・二等兵)とつらなる。召集新兵は最下位。下位の新兵には、古参兵の無茶くちなこき使い・問答無用のビンタあるいは理不尽な責め苦や私的制裁が待っていた。私が受けた一例をあげよう。入隊して二日目だった。昼食を済ませ、流し場で自分の食器を洗っていたら突然ビンタを喰った。びっくりして、殴った相手はと見ると、見たこともない他班の兵長である。あとで思い返すと、その直前に「中川、飯びつ洗え」の声は聞えていた。しかし、私がまさか命令されている当人だとは思ひもなかった。その命令は他に大勢いる中の同姓者に対してのものと思って、平気で自分の食器を洗っていたのである。そこへビンタであった。というのは、私の名前など入隊二日目で、未だ誰も知っている筈がないと思っていたからである。ところが何のことはない、彼は私の胸の名札をみて叫んでいたのである。偶然そこに居合わせただけで、部下でもない者に対して突然仕事をいいつけ、すぐさま問

答無用の鉄拳制裁である。

さらにもう少し内務班の非人間的性の例をあげてみよう。(i)朝の点呼・夕の入浴―毎朝六時の起床ラッパでとび起き、當庭に整列、人員点呼を受け、軍人勅諭を唱え体操をする。この整列は先着順で、前方位に並んでいる者ほど精勤者とみなされるようである。従って、起きたての用便もこらえて駆けつける者が多い。私など小便をしてから走りつくと常にビリの方であった。解散後も同じで、人なみに洗顔・大便をすませて内務班に戻るようでは、いつとはなしに発せられる古参兵のいいつけに満足に対応ができない。そのときは大目玉である。入浴も規定では夕食後に時間が設けられている。しかし、これもたてまえ、新兵が入浴中で内務班に不在のときなどは、「初年兵のくせに入浴している。けしからん」と帰宅後しほられる。私達は夏の暑い最中だったが、入隊後十日ぐらい入浴した記憶がない。要するに人間基本の生理的・衛生的な生活さえも抑圧されていた。(ii)夜の地獄帯―内務班では夕食後か

ら九時の就寝前の点呼までの時間帯が生地獄である。本来はこの時間帯こそ休息のものであるが――部屋には各人のベッドが並んでいるが、この時間帯には腰をかけることも横になることも許されない。堅い木の長椅子に腰かけられるだけである。その間、毎晩のように古参兵が「銃の手入が悪い」「靴の裏に土がついている」あるいは「手箱の整頓ができていない」などなど、わざと些細な欠点をさがしだしてはしごきはじめる。――長時間の銃のささげ持ち・靴を首にぶら下げて立たせておく等々心身に責め苦を課す。これらはまさに方で、連帯責任があるといって全員を殴る・皮スリッパの裏で顔にあと形がつくほどたく等。とにかく毎晩なぐりたおされた。(iii)古参兵の空いばり古参兵のなかには初年兵に自分の下着を洗濯させる、ひどい者は部屋から教練に出入りする際、昔の大名然と自分の靴のはきぬぎ、ゲートルの脱着をやらせる。肩をもませる者もいた。

書き上げればきりが無い。こんな非人間的な生活が、であるが、私はこの時つくづく「自由な時間の有難味」を感じていた。私の人生で、あの時ほど自由時間の貴重さを感じたことはない。今にしてみれば実に得難い体験であった。

敗戦後半世紀近くたった今でも、旧日本軍の行った捕虜虐待や住民虐殺あるいは「慰安婦」問題等々に対する被害者からの提訴の声があとを断たない。これらもその根源は内務班の非人間性と同根のものと思われるてならない。

(三山木在住)

私の班だけでなく広く日本陸軍内務班の実状であった。昼間の軍事教練は将校が顔を出すこともあり、そう無茶なことはなかった。将校が時々内務班を巡察する仕組みになっていたが、形式的・きれいに済まされていた。しかし、将校が内務班のひどい実状を知らない筈がない。内務班統治のための馴れ合いであって、見てしらぬ風をよそおっていたとしか考えられない。こんな具合で全く息つく間もない日々が二週間続いた。あとの日曜日が来た。入隊後はじめて、今日の午後には休んでよろしいとの許可が出た。出来ることといえば外出はもつてのほかで、①昼間からベットに横になって休養してもよい。②用事をいつけないから班内外で勝手にしてよい、とのことであった。われわれ初年兵は何をしたかといえば、まっ先に下着の洗濯をし、乾くまで物干し竿の下に座って盗難防止の見張りや休息であった。それから部屋に戻り家へのはじめての手紙を書いた。大の男が洗濯物の干し竿の下で見張番とは……。一般社会人が見ればふき出しそうな光景

辛かった三年間

古川 善 三 (七三)

昭和十六年十二月八日に始った太平洋戦争が、緒戦の華々しい戦果にも、ようやく陰りが出て来た、昭和十八年七月二十五日頃に召集令状が来た。友人もほとんど現役や召集で、兵役についており、家にいるのが、肩身が狭い思いをしていたので、ようやくこれで俺も一人前だと思った。八月一日、歓呼の声に送られて、中部四十三部隊二中隊に入る。二年兵、三年兵は、人員が少ないので、既当番などの当番は上番下番でなくて上番上番（休みなしのこと）だったらしい。翌日より早速既へやらされる。既は最中に通路を挟んで、馬

が尻向けて繋いである。兵隊は尻向けて「オーラ、オーラ」と言いながら入って行く。馴れるまで怖かった。前向きで入って行くと、腹を蹴られるので注意せよとのこと、馬は新兵だと舐められる。蹴ったり（尾に白布）抱いたり、咬んだり（鬣に白布）するので油断出来ない。

入営して約一か月ほどした時分に、既で三年兵の一等兵（蹄鉄工務兵「鉄チン」と言った）に、いきなり平手打ちで顔を殴られた。それで耳が聞こえなくなった。三日間の就寝練兵休で戦友が起床ラップでバタバタしているのに寝ておれるのは大変気持よかった。ただ、週番上等兵に引率されて医務室行き、軍医に誰に殴られたか言えと言われたが後の制裁が怖いので、トコトン言わなかった。田辺町出身のK曹長（私の小学校の一級上）が面会に来てくれた。下士官集会所へつれて行って家からの御馳走を腹一杯、食べさせてくれた。

ところが夜に内務班で「貴様、K曹長を知っていると偉そうにする」とさんざん殴られた。挽馬演習で宇治

川を遡って大石を経て田原で露営。翌日は長池演習場経由、私の家の前を通り（家の前で小休止）八幡を経て帰営。Y馬係准尉が勝手に（S君が魚屋の丁稚で宿舎で魚を売りに行つて頼んでくれたらしい）予定を変更して家の前を通ったことが判り、Y准尉はすぐにニユーギニア方面へ転属されたらしい。後で聞いて大変なことになったんだと思った。Y准尉は無事復員されただろうか？

内務班では毎晩のように殴られた。理由もあまりないのに殴られるので腹が立つが仕様なかった。既当番についた時、戦友と一緒に腹いせに帯で馬の尻をドツいて腹いせにした。朝になって古年兵が今日の馬はなぜかイレコンどると言っているのを聞いて胸がスウーとした。十月の中頃だったろうか、各年兵に検閲の使役で駄馬（馬の両背に荷物を乗せる）演習に清滝方面へ二泊三日で行った。露営していると周囲がガヤガヤと喧しい。各年兵の言うには、五十三師団に動員令が来た。ビルマ方面へ行くらしい。お前ら補充兵も満期

せずに行かねばならんだろうとのこと、帰営すると、早速二泊三日の外泊が許可された。帰営する際にもこれで家も見納めとの何等の悲壮感もなかった。

師団に動員が来ると大変で、特科隊は転属する者（私の助教高間軍曹（乙幹）は獣医の免許があるので一躍、見習士官となって当番をつれて転属して行った）、転入する者、編成替え等で大騒ぎで、将校、下士官、兵の順で続々応召で入って来た。

十二月末、行軍で梅小路貨物駅から、軍用列車に乗り下関下車、門司より輸送船に乗る。玄海灘で敵潜水艦が出たと言うので、乗組員（大半、中国人か朝鮮人）が大騒ぎしたが、無事、上海吳淞に上陸、一か月ほど、滞在して南方行きの輸送船に乗る。十九年二月十一日の夜、敵潜水艦の魚雷攻撃を受けたが、輸送船の吃水が浅いので、三本船底をくぐっただけで助かる。山本の小西信之君が、北京の予備士官学校を出て祭（十五師団）へ、見習士官で追及して行くのと同じ船なので「小西、この戦争は日本が負けれると思う。なぜなら支

那の沿岸まで敵の潜水艦が来るようでは」と言うと、小西は将校らしく「日本は絶対に敗けない。近い内にドイツから潜水艦でマツチの棒の頭ぐらいの物で富士山がフツ飛ぶ爆弾が来る？（後で考えると原子爆弾だったのか）」と言っていた。戦争に敗けると言った私が無事還り、勝ったと言った小西が死ぬとは、皮肉なことである。台湾の高雄（夜衛兵で立っていると友軍の輸送船が、敵潜水艦に沈没させられて死体も引き上げて棺桶が、ズラリと並んであるのを見てゾツとした）海南島、榆林を経て三月十日頃、サイゴンに上陸、敵の捕虜がパンツ一つで、我軍の編上靴、水筒で使役についているのを見て「日本は勝っているのだなあ」と思う。

タイ国、バンコックの郊外のバンボンに兵站があった。そこからシンガポールまで、馬受領に行った。薪を焚く機関車で停車場へ着くと、薪を積み込むので約一週間かかった。現住民が交換交換と来る。煙草一ヶでバナナ一房もあった。

バー赤痢）の凄く処で、生鮮野菜は全然なく、乾燥野菜、粉醬油、粉味噌で、脚気になる者も続出した。ひどいと寧丸が四、五倍にはれて歩けなくなる者もいた。制空権は完全に敵に握られており、友軍の飛行機はビルマでは見た事がなかった。朝、空が明けると敵の観測機が飛んでおり、それに見つかり、十分以内に戦闘爆撃機が来て銃爆撃を繰り返すので行動は夜間のみだった。初めのうち、敵機の銃爆撃は非常に恐ろしかったが、自分の陣地がやられないと判ると、ジャングルからそれを見ていったが、低空で飛ぶため飛行士の眼鏡やサンダルがよく見えた。

師団輜重は後方部隊だが、鉄橋は破壊され、輸送困難で連れて行った日本馬も雨期なのに厩が無く、雨にうたれて全部死んでしまった。ビルマの牛を徴発して牛車（二頭立て）で輸送したり、牛車が行けない処へは、糧秣弾薬を背負って前線へ配んだ。

アミーバ赤痢は、血便が出て止まらなと死んでしまう。私も血便が出たが、薬は無いここで、俺もお仕

凄絶ビルマ戦線

「おおいッ」「お前達何処（府県）の兵隊か？」「京都師団（ビルマ派遣安一〇〇三）部隊（五十三師団輜重兵（現在の輸送部隊）五十三連隊だッ」「可愛相になあッ」「何故だあ？」「ビルマから生きて帰った者は一人もないぞッ」「骨にならなきあなあッ」（事実、ビルマからの貨車には、日本兵の死体がごろがっていた）泰緬鉄道で、ビルマへ向う途中の停車場（と言っても施設も何もない）で、食事の給与を受けた時の話であったが、これほど敗け戦とは。つらい悲惨なものかとは、その当時は知る由もなかった。当時インパール作戦が始っており、我友軍は優秀な英印軍の反撃で苦戦を強られていた。また、中国の雲南省と境の拉孟（らもう）騰越（とうえつ）でも米式装備の中国軍に圧迫されていた。このため私達安兵団は、入緬後、助け人部隊として休む間もなく、次々に前線へと送り込まれて行った。

私が行った北ビルマは、風土砂（マラリア、アミー

舞いかと思ったが、携帯用の「正露丸」を約三十錠を一度に飲んだら血便は止まった。私にとって「正露丸」は命の恩人だった。

マラリアがひどくなって入院させられた。病院といってもマンダレー郊外のバゴダ（寺院）だった。英軍もビルマのバゴダは爆撃しなかったから。しかし、病院でも薬はほとんどなかった。約二十日ほどで退院させられた。このとき、普賢寺の丁君が死んだと聞かされた。

部隊はメーカーラー附近まで、後退しており、インパール作戦に参加した部隊を迎えていた。安兵団の歩兵が死傷者と病院で激減したので、輜重隊で臨時歩兵隊を編成され参加したが、毎日ジャングルの内で敵戦車のキャタピラにフトン爆雷（アンパンと言った）をかます演習ばかりやらされていた。命令で糧秣を徴発にやらされて、三日ほどで部隊へ戻ったら袋抜けの穀、英印軍の本格的な反撃が始ったのだ。湾岸戦争の時のように、飛行機で充分銃爆撃した後、千数百輛の

戦車、装甲車で襲って来たのだから、一たまりもなかったらしい。取り残されたのは、軍医見習士官と約五十名の下士官だけで、どちらへ行ったらよいのかも判らなかつた。結局、味方のいる方へ退がろうとなつて、昼は敵機の銃爆撃と戦車の攻撃で行動出来ず、夜間、ビルマ人部落の村長に日本軍のいる方面へ案内してもらつた。一度だけ英印軍の陣地に案内されかけたが、通信の有線、さんごうで判つて寸前に逃げ出したこともあつた。ビルマ人は大体、日本兵に好意を持っている人が多かつたので助かつた。約一週間で友軍までたどりつくことが出来たが、最後尾のため、戦車、地雷をうずめさせられた。狼兵団歩兵の敵陣地への切込み、弓兵団の敵空襲にも隊伍くずさぬ歩兵等々。昼間平野を退却すると、敵機の銃爆撃、敵戦車の追撃のため山中へ入つた。(野砲隊などは夜間退却し、昼は敵機にわからぬように車輛のスジを箒ではいて判らぬ様にしないとジャングルが爆撃される)食糧はビルマ人が飼っている象の餌にする米が沢山あつた。塩が

まつた。

敵機が毎日降伏勧告のビラをまき「日本の連合艦隊は海の藻屑と消えた」等には一つも信用せず、煙草を巻く紙、便所紙に使うのでビラのまくのを待っていた。又、「八月中頃になると戦争は終る」と前線まで、伝つて来たがここは、捕虜収容所の英軍捕虜が無線を秘密で持ち込んで聞いて監視の兵隊に、日本は八月中頃に降伏するので虐待たら戦犯だと言つていたらしい。しかし、日本は絶対負けるとは夢にも思つていなかった。子供の時から、軍国主義の教育が徹底していたからだと思ふ。

教育は非常に大切なものだ。また原隊での厳しい教育、ビンタもこれほどせねば、戦争が出来なかつたのかなあと、五十年経つた今、思つたりもする。入院するため患者収容所より後送されるといっても頭の毛は延次第、髭だらけでヨレヨレの戦闘帽、シャツ、ズボン、履く靴もなく跣で鉄道線路を歩く。石コロで足の痛かつたことを今でも思い出す。(写真で撮っておきた

なかつた。塩のない飯で辛棒した。この山中で味方の多数の傷病兵に出会つた。顔や手にウジをわかつて臭くて仕様なかつた、これらの兵隊は無事、退却出来たであろうか。また、多数の友軍の死体がころがっていた。後でのべる白骨街道だったらしい。ようやく部隊に辿りついた時は、六月になっていただろうか。ビルマに雨期が始つていた。我軍はシタン河(木津川の川幅の三倍くらいある)をビルマ最後の抵抗線として、ラングーン方面より撤退する友軍を援護することとなつた。退却中に出なかつたマラリアが又出て来た。毎日午後になると四十度以上の高熱で悩まされた。熱発前の悪寒で、ウナっているのに聞こえるのは「補充兵で残つたのは古川だけが、これももう死ぬだろう」の声、「クソッ!こんなところで死ぬものか!」と精神的に頑張つた。ようやく入院させられたが、患者収容所の軍医は「輜重隊はこんなになるまで入院させない。無茶だ!」と言つていた。後方へ退がる途中に、日本は戦争に負けたと聞いた時は、力が全身から抜けてし

かつた)バンコクの病院まで後送された。看護婦の日本女性を初めて見た。伝染病のコレラが大流行した。隔離されて一晩ウナっていると、翌朝には死んで病室前に担架に乗せてあつた。検便ばかりされて肛門へガラス棒を突つ込まれるのは痛かつた。

英軍の命令でビルマ派遣軍の兵隊は原隊復帰をせず、最寄り部隊へ転属せよとのこと、ナコンナヨークの三十六師団(熊本)へ転属したが、戦争に負けていても、現役の初年兵は、毎晩ビンビン殴られていた。近くに四師団が来ていると言うのでまた、輜重四連隊へ転属。二十一年六月初め、タイ国人からの襲撃を防ぐため英軍から一小隊に小銃一丁を備つて(小休止になるとその小銃をもっている下士官を十人ほどで盗まれないよう取り囲む)バンコクまで行軍して乗船する。武装解除された軍隊なんて何の力もなかつた。

復員船は二十一年六月二十日頃、鹿児島港到着、鹿児島から復員列車で帰る途中広島を通過原爆で跡形もなかつたのに原爆のことも知らなかつた。三十六時間

(一昼夜半) かって京都駅へ早朝着いた。
私の子供時分から「輜重輸卒兵隊ならば電信柱に花が咲く」とか「トンボ蝶も鳥の内」とか蔑まれており、すき好んでもいないのに命令とは言え、俺は何んでこんな兵隊になったのかと召集されて以来、始終思っていたが輜重兵だったお陰で無事、生還出来たのだなあと今では思っている。

輸送船の魚雷攻撃(三発船底をくぐったらしい)敵機の銃爆撃、僅かの兵で敵の内へ取り残された時、シッタン河の抵抗線が雨期でなかったら、マラリアやアミバー赤痢等々、生と死の紙一重の幾度びかの危なかったのが夢のようである。

因みに安兵団(五十三師団)一万六千二百一名中、生還出来た者、四千六百四十八名、七割以上が還れなかった。なお、出征以来、輸送を断たれているのと、激戦で且つ、負け戦なので補給出来なかったのか、内地から一通の手紙も慰問袋も来なかった。

(三山木在住)

軍隊生活の思い出

藤井 武雄(七三)

私が満二十一歳の時、国民は徴兵検査を受け兵役に服する義務がありました。昭和十六年一月十日、伏見歩兵中部三七部隊五中隊へ入隊。入営二ヶ月前から庭先に旗やのぼりを立て毎日その世話をする。一月十日の入隊当日は、同級生七人は小学校に集り、村長様はじめ、各種団体の皆々様の盛大な御見送りを受け、万才の声で旗やのぼりに送られて国家のため滅死報公を誓って、駅で大勢の見送りを受け、これほどの感激を入したことは無かった。車窓より皆様に別れを告げて入隊しました。初年兵の入隊を古参兵が出迎へてくれた。

すべてがラッパ合図で、火の気の無い内務班、寝台、菓布団、毛布三枚、初めて食べる半麦飯、うどん、代用食、消灯ラッパ、週番士官の靴の音、週番下士官の見廻り、寒くて寝つかれん。二、三日はお客様のもてなしである。

「初年兵集れ。」班は上等兵の荒い言葉に気合いが入る。隣の班内も同じ様な事、容赦無い。古年兵は初年兵の行動に気をつけている。服に身体を合わす。大きな過ぎる。靴も足に合わん。辛抱した毎日が続く。軍事教練、班内の兵器、被服、食事の配膳、学科もある。軍人勅諭の暗記、軍隊には私的制裁はつき物で、戒めにビンタ、捧銃、ウグイスの谷渡り、営庭の早駆けも初年兵全員に、相互の共同精神修養のため度々ある。夕食後は酒、菓子を買える。酒保(売店のこと)もあるが、新兵には買いに行く時間が無い。戦友の古参兵が、時たま私の寝具の中にあん巻を入れてくれた。今もその人に御礼を言いたい。寝つかれない時、京阪電車は無情に通っている、懐かしい。朝食までの稲荷山

の早駆け、銃剣術、営庭のマラソン、朝の寒稽古、射撃大会には何時も良い点数が取れた。隊内生活になれて来た。面会日も近づく。母親が着物にかくし、営門歩哨の目をごまかすかのように食べ物等を持って面会に来てくれる。三回ほどあつたらうか。持った物は便所の中へ、この場所は誰にも見られることはない、食べられるだけ食べた。面会人の無い戦友にもやった。(便所と言っても今のような水洗便所とちがう)

入隊数日後、教官引率で桃山御陵、平安神宮も参拝した。外出も出来る様になり、京都市内へ時々行くことがあつた。一期検閲は長池演習場で、今の砂取場あたり。帰営行軍の時の小倉の堤は長かった。二期検閲は、滋賀の今津にあり途中一泊して検閲を受けた。その年の八月、面会外出禁止となる。召集兵が大勢入隊して来る。戦事編成なる。内務も楽になる。毎日新品服、兵器の支給がある。毎日の教練は縄ばしごを使い艦船移乗が主な練習である。十月中旬家族との面会も許されず、部隊は中隊毎に南門より出発し、演習にて

も出かけるが如く、梅小路駅へ行軍。客貨車で大阪港の港倉庫で一週間乗船待ち。馬は船底、人馬同居の生活、船内は身動きも出来ず。出港、船に弱く食事出来ず。瀬戸内海の夜景を初めて見る。これが故郷の見納めになるかも知れん。淋しい思いで内海を通過。九州も遠くなり、これが最後かと玄海灘の波高く海は荒れ、なお船の揺れは激しく成った。日毎に暑く、我等には任地も知れず、船団は南下する。台湾基隆港に接壁、滝川小学校で宿舍とる。

昭和十六年十二月八日、中隊長より大東亜戦争勃発の訓示あり。数日後、乗船し出港。南下。船内暑く海洋に出る。大船団と合流。上空は飛行機、海軍駆逐艦が我が船団の警戒にあたる。無事に十二月二十二日、真夜中月光の明るい比島リンガエン湾に停泊。遠く敵地海岸線に椰子林が見える。午前五時上陸準備。米比軍は陣地より我が船団及び上陸船艇に激しい銃砲撃曳光弾で射ちまくる。日本軍は敵陣地に飛行機の爆撃。艦船からも援護射撃で、湾内は戦火の海。下船準備、

縄ばしごを使つての移乗開始。台風の影響で波は高い。縄ばしごは思うように大発船艇に移乗出来ない。各自装備、兵器、食糧、防毒面、救命胴衣等で身軽に行動出来ない。敵弾容赦なく射つて来る。工兵隊の大発船艇は、海岸より遠くの海中で飛び込み背丈ほどあつた。敵はなおも強固に撃つて来る。泳いで上陸。砂浜を駆け上る。海水に濡れた軍衣は暑さで乾いた。先発一大隊上陸、兵士は波打際に早くも多数の戦死者が出ていた。敵地上陸、小高い丘に駆け上り、今夜陣地死守出来れば上陸成功と、小隊長(内海少尉)が隊員に伝達する。敵は大軍の上陸を察知するや自走砲で、後退住民は誰一人の姿もない。犬の遠吠えが聞える。バギオヨリマニラに通ずる立派な舗装道路を軽装具になり部隊はマニラ進撃戦となる。タルラックに於て激戦、敵弾が連隊本部附近に炸裂し連隊長戦死す。大晦日は砲煙の中で迎え、部隊はなおも進撃、敵はバタン半島丘陵地の構築陣地に後退、橋も破壊され友軍の車輛部隊は悪戦苦闘、我先に進撃、ナチブ山、サマット山、マリ

ベレス山等の敵陣地を遠く眺める。敵サンフェルナンドに於いて進撃の日本軍に、強固に迫撃砲で大量に射ちまくる。サマット山麓の広々とした砂糖キビ畑は焼野原。わが中隊は凹地にて突撃準備中、敵迫撃砲陣地に炸裂、西村中隊長、佐藤曹長負傷、午前七時砲兵隊の支援射撃で、我が中隊は突撃す。工兵隊は鉄条網を破壊。破壊口に向つて一斉突撃。敵弾ブスンプスンと土煙が上る。丘陵の斜面で腹ばいになっていた者は狙撃された。第二線鉄条網発見。鉄条鉄は無い。死者多数出た。炎天下、敵はなおも激しく射ちまくる。身動き出来ない。タコツボを堀り伏せる。

夜陰を待つて友軍の陣地にたどり着く。この時、部隊に後退の移動命令があり、全員集結。戦死者の収容も出来ず、放置して夕暮を待つて後方に転進。この時福知山部隊の恒広大隊がバタン半島、カナスガ岬に敵前上陸。マリベレス米比軍陣地より激しい攻撃により、恒広大隊は全滅。この死傷者の収容に中隊はバガックに於いて決死の任務を受け、死傷者の救助に工兵隊の

大発艇数隻に数人同乗し真夜中カナスガ岬へ向う。敵は陣地より探照燈で海上を照射し舟艇に激しい曳光弾の銃撃、乱射を受け、海岸線を縫うかの様に上陸。部隊の死傷者の救助収容に月の明りで捜索。誰一人の兵士も見つからず、持って来たゴムボート数拾隻海岸線の波打際に放流。夜明けを待って引き上げた。三日続いた部隊は、密林内に於いて総攻撃の増援の集結を待った。支那派遣からの増援が来た。兵隊は大量の捕獲兵器の山積を見て、激戦を物語るかの様に驚かれた。砲撃は続く。東海岸道路をマリベレス陣地へと進撃。

敵はマリベレス陣地附近に集結しており、米比軍の戦死者も多く、道端に遺体が放置。口からウジ虫が出て悪臭を放つ。進撃の戦車隊、搜索隊の通過の土埃りで煙幕の様である。強固な敵も日本軍の進撃には後退し、飛行機爆撃。砲撃が陣地に炸裂す。半島を揺がすが如く筆舌で表現出来ない光景。夜のマニラ市内は赤々と電燈の光が遠くに見える。皇軍の攻撃は、なおも続き服は汗と埃りで椰子の木は砲撃弾で無残に倒れ、一面

肌の寒さを感じ、気温の低い小高い丘で道路の向側は、タール湖で景色も良い。一か月ほどいた。

部隊はルソン島南部ビーコル地方ソルソゴン市の警備に移動し、米比軍営舎に着く。反目ゲリラ討伐。残敵。掃蕩戦を行う。初年兵が中隊に追及の途中残敵と遭遇し小隊長戦死する。住民も帰郷、町も活気づく。命令により比島憲兵隊へ補助憲兵として転属、治安維持に服務する。原隊はサマル島に移動した。戦局は悪化する。敵爆撃機大編隊でマニラ湾停泊の艦船及び飛行場の軍事施設の爆撃が連日続く。被害甚大、日本軍の戦闘機応戦する。激しい空中戦市内の住民は動揺する。勤務多忙となる。日本軍はマニラ市内は防衛隊で守備、主力部隊はルソン島北部に移動する。隊本部もルソン島北部のバンバン市に移動。我が分隊はマニラ地区勤兵団配属以後隊本部に追及する。米軍リンガエ湾に上陸の情報、敵前を強行突破、一昼夜にして追及、日本軍部隊統々と北部平野に移動、転進の軍車輛で混雑。マニラ在留邦人婦女子も北部平野に移動、敵

焼野原の情景である。激戦を物語る、大きな砲弾の穴がいたる所にあり。中隊はマリベレス米比軍陣地の僅かの所まで殺到していた。前方より米軍の将官らしい一団が大きな白旗掲げて(シート)日本軍の前に現れ投降して来た。初めて見る光景でマリベレス一帯の攻略は奇妙な状態で終幕をした。この野郎と憎む思いで銃で射殺したかった。永い間苦しめられ、日本兵の中にはハタイタ兵士もいた。捕虜は多数投降して来る。

中隊は集結し、トラックで進撃して来た道を後方に移動した。米比軍の捕虜は、道路側に集っている。初めて通過するマニラ市内、これが戦争のあった都市と思えない程の平和な市内であった。タガイタイ米比軍の仮営舎に部隊は宿営。屋根の下で寝る事は、上陸以来何日振りであろう。眼下にマニラ湾を眺め、その西方に激戦地であったバタン半島、米比軍極東要塞地のコレヒドール島に攻略戦の砲爆撃砲声が高い丘の上まで聞える。過日の激戦を想定し、我が部隊は疲れた身体を休養する。常夏とは言え、この丘の上は夜になると

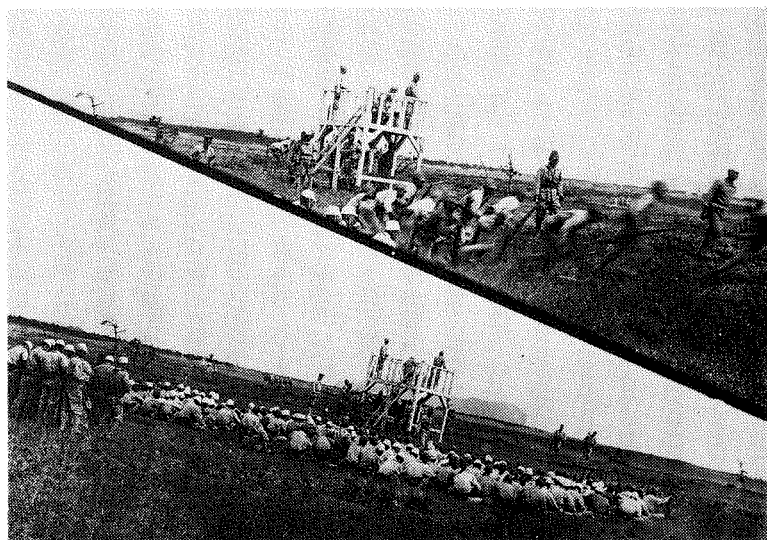
米軍はリンガエン湾に強固なる機動部隊を上陸、敵機の爆撃、戦車の銃砲火で山陵の日本軍陣地にガソリン油を投下し火炎放射器で攻撃、強固な日本軍防戦する。爆撃の激しい最前線の部隊は死守。全滅寸前。我が分隊は後方に於いて治安宣撫の形態。ゲリラ情報に活動。山岳地の大部隊の生活は食糧確保出来ず、野草、野生サツマイモ等を掘る。邦人婦女子皆餓死状態となる。

前線部隊は食糧兵器補充なし、敵観測機悠々と谷間の手の届くほどのところを飛んで行く。迎撃出来ず敵機に発見されると目標となり砲撃される、応戦する者なし、今日も後退、敵の砲爆撃は続く、現住民のゲリラ活動は活発になる。体力が心配、病人続出、自決者も出る。キャンガンに於いて終戦となる。終戦前日にも死者が出た。無条件降伏の傳達あり。武装解除、捕虜になる。下山しトラックでサンフェルナンド駅へ。列車でマニラ市のマッキンレイの捕虜収容所へ。労役一年三か月、上陸後の長い激しい死闘であった。この島に骨を埋めた戦友に何と言って島を去ることが出来る

だろうか。二十一年十二月八日、名古屋港に上陸復員する。

参考に悲運京都兵団防人の詩編をお読み下さい。

(三山木在住)



上．総攻撃の演習 下．演習終了後の見学風景